

# 平成 25 年度事業報告について

平成 26 年 6 月

公益財団法人 大阪市博物館協会

# 平成25年度事業報告について

## はじめに

平成25年度、大阪市博物館協会は設立4年目、公益財団法人としては2年目であった。また、大阪市から受託している博物館・美術館5館の管理運営は、平成22年度から平成25年度までの4年間の指定管理期間を終えた。

大阪市の博物館の経営に関しては、国内でも傑出した博物館群を擁するという大阪市の優位性に着目し、これを文化発信、都市魅力戦略の柱として位置づけるべく、これまで団体の異なっていた経営形態の一元化を図り、より効率的、効果的な新たな経営形態をめざしてきた。

当協会は平成22年度の設立以降、大阪歴史博物館、大阪市立自然史博物館、大阪市立美術館、大阪市立東洋陶磁美術館、大阪城天守閣の5館の指定管理者制度における管理代行を行っている。そして、埋蔵文化財発掘調査事業を実施している大阪文化財研究所も含めて各種の事業を施設ごとに、また相互に連携しながら実施しているが、ここでは公益財団法人への移行を認定された際の「協会事業の位置付け」と「協会経営計画」を再確認した上で、協会の「平成25年度の事業」について報告する。

### 1. 協会事業の位置付け

協会事業を「公益目的事業」「収益事業等」として位置づけ、平成24年4月から公益財団法人として事業を実施している。

#### (1) 公益目的事業

この事業については次の9事業で構成されており、隣接する分野の事業を相互に連携し総合力を発揮することがより効果的であることが位置付けられている。

- ① 埋蔵文化財の発掘調査と保存科学分析事業（受託事業）
- ② 文化財や博物館関係資料の調査研究事業（自主事業）
- ③ 保存科学分析技術の開発と文化財等資料への応用事業（自主事業）
- ④ 文化財等資料を活用した展示・公開事業（自主事業）
- ⑤ 講座等による教育普及や人材育成事業（自主事業）
- ⑥ 体験活動事業（自主事業）
- ⑦ その他活動（自主事業）
- ⑧ 文化財関連施設管理・活用事業（受託事業）
- ⑨ 大阪市立博物館・美術館管理運営事業（指定管理による受託事業）

#### (2) 収益事業等

##### ① 収益事業

施設の一部を売店・食堂等として使用することで、来館者サービスの向上やその収益を公益目的事業に充てることを目的とする事業

##### ② その他の事業（相互扶助等事業）

友の会会員に対して行う講演会等を通じて、友の会活動の推進や会員の美術・東洋陶磁に関する公益目的事業に対する理解を深めることを目的とする事業

## 2. 協会の経営計画

経営計画は平成 23 年 9 月に策定され、「団体のビジョン」「経営目標」等が定められている。

### (1) 団体のビジョン

協会の設置目的を実現するため、次の 4 つの基本方針の下で活動することとしている。

- ① 大阪市の博物館・美術館の実績・伝統を継承するとともに、新たな魅力を創出する。
- ② 都市大阪にふさわしい、さまざまな利用者ニーズに応えられる博物館をめざす。
- ③ 大阪市の博物館・美術館の相互連携によって総合力を発揮し、都市大阪の魅力の発信拠点をめざす。
- ④ 30 年を越える遺跡の考古学的調査を活かした確かな知識と技術にもとづき、文化財の幅広く総合的な調査研究を行い、その成果を広く発信する。

### (2) 経営目標

博物館 5 施設の指定管理者として、上記のビジョンに沿って、平成 23 年度から平成 27 年度までの 5 カ年の目標を 5 点掲げて活動することとしている。

目標 1 指定管理 5 施設全体の常設展入館者数の増加

〔27 年度目標〕 2,160 千人 〔25 年度実績〕 2,128 千人

目標 2 各館の事業成果や広く国内外の作品を紹介する特別展の充実

〔目標〕 年間で 15 本程度 〔25 年度実績〕 18 本

目標 3 講演会や体験学習等を通じた資料や研究成果の積極的公開・活用

〔目標〕 年間 400 回・参加 7 万人 〔25 年度実績〕 524 回、参加 93,412 人

目標 4 指定管理 5 施設全体での学校利用の促進

〔27 年度目標〕 延べ 3,300 校 〔25 年度実績〕 延べ 2,622 校

目標 5 当協会所管の各館並びに（公財）大阪科学振興協会・大阪市立大学など関係機関との連携事業の展開 〔目標〕 年間 80 件 〔25 年度実績〕 216 件

#### 【大阪市博物館協会 基本方針】

1. 各館の実績・伝統を継承するとともに、新たな魅力を創出します。
2. 都市大阪にふさわしい、さまざまな来館者に応えられる博物館をめざします。
3. 相互の連携によって総合力を発揮し、都市大阪の魅力の発信拠点をめざします。
4. 点検・評価を行い、ニーズに則した事業の実施と効率的な運営をめざします。

## 2 大阪文化財研究所事業

平成25年度のおもな発掘調査には古代難波宮の東方官衙地域、大坂城跡の豊臣期および徳川期の本丸地域、平野区長原遺跡の弥生時代や古墳時代の集落や墓、古代条里などがある。いずれもこれまでの研究を進展させる成果で、現地説明会や速報展示などで公表に努めた。また、一昨年度に報道発表された難波宮・京の広がりや整備状況に新知見を与えた調査、考古学の研究史上で著名な平野区瓜破遺跡の弥生時代集落など、重要な発掘調査の報告書を刊行した。文化財の保存科学研究も順調に進め、これらの成果を博物館・美術館群、地域の市民団体との連携で活用し、各種の教育普及事業を通じて大阪の歴史と文化財の周知を図った。

また、文化庁・福島県の要請に応じて、東日本大震災復興支援のため埋蔵文化財の発掘調査担当者1名を1年間（財）福島県文化振興財団に派遣した。

### 1. 埋蔵文化財の調査及び報告書作成など

#### (1) 文化財調査受託事業（〔 〕は昨年度、個別の事業は一覧表参照）

平成25年度の発掘調査は契約件数205〔157〕件、調査面積18,610〔17,333〕㎡、受託額445,912,876〔672,017,677〕円（税抜）であった。前年比で受託件数は130%、面積は107%に増加したが、金額は66%に減少した。報告書作成受託収入と合わせた受託額は6億6000万円強〔7億5,400万円弱〕で80%程度である。調査では1件あたりの小規模化の傾向が続いている。委託相手別の金額比率は、大阪市関係が45.03〔56.09〕%（59〔66〕件）、国が13.10〔12.45〕%（1〔2〕件）、大阪府関係が4.23〔0.00〕%（1〔0〕件）、民間が37.64〔31.45〕%（162〔113〕件）となった。大阪市からの受託額は24年度の総額約4億2,300万円弱から総額約2億7,050万円弱（64%）に減少した。また民間事業者からの受託額は約2億2,600万円強で、昨年度と概ね同程度であった。

	発掘調査受託事業				報告書作成受託事業				合計	
	件数	面積	受託額(税抜)		件数	受託額(税抜)				
国関係	-	-	-	0.00%	1	78,653,000	50.84%	78,653,000	13.10%	
大阪府	1	653	25,402,000	5.70%	-	-	0.00%	25,402,000	4.23%	
大阪市	42	4,286	194,404,876	43.60%	17	76,056,000	49.16%	270,460,876	45.03%	
民間	162	13,671	226,106,000	50.70%	-	※	0.00%	226,106,000	37.64%	
合計	205	18,610	445,912,876	100.00%	18	154,709,000	100.00%	600,621,876	100.00%	

●上記の報告書作成受託事業には過年度調査（29件）事業分は含めていない

※印には発掘調査受託事業で報告書を印刷・刊行したもの2冊がある

おもな調査成果には難波宮跡・大坂城跡・長原遺跡に関連するものがある。史跡整備事業に付随する難波宮跡東方官衙地域の調査では、土壇を伴う大規模な区画施設の構造を探る発掘が継続されている。奈良時代の宮殿施設でも新段階に位置づけられ、孝謙天皇の東南新宮など文献との対応関係が検討されている。大坂城跡では昭和59年に発見された豊臣期大坂城詰ノ丸の石垣公開施設建設に向けた調査で、発見後埋め戻されていた豊臣期石垣や徳川期の金蔵施設の変遷を調査した。また、平野区長原遺跡では弥生時代末の竪穴建物や古墳時代の墳墓、古代の水田条里などに関する重要な発見があったほか、古代では中央区難波宮跡の宮殿南側の谷から飛鳥時代の遺物群、近世では難波宮跡・森の宮遺跡で手工

業（骨細工）関連遺物など特筆すべき各時代の調査成果があった。

そのほか、昨年度に始まった大阪市教育委員会が調査担当者となる確認調査の件数も大幅に増加し、市内中心部を主としてより細密に民間開発事業へ対応するようになった。

平成25年度は合計20冊の報告書を刊行し、全国約300箇所の教育委員会や発掘調査機関、大学などに配布した。特に重要な成果をまとめた報告書には次のものがある。『難波宮址の研究』19は難波宮の想定西限ラインより西で見つかった宮内に匹敵する施設を報告し、宮域を再検討する重要な資料を提出した。天王寺区『北河堀町所在遺跡』は難波京の想定南限ラインをまたいで整然と並ぶ建物群を報告し、京域の再検討も促すものとなった。『瓜破遺跡・住道矢田遺跡・矢田遺跡』では、瓜破遺跡の成果を中心に、弥生時代前期の集落とそれを取り巻く濠の調査を報告した。そのほか『長原遺跡』28では弥生時代と古墳時代の墳墓、『加美遺跡』4では古代の建物群を報告するなど、重要な成果を公表している。

以上のほか、大阪市内北部の過年度調査（29件）の報告書作成作業を行った。

## (2) 保存処理・分析事業

大阪府下では八尾市・藤井寺市から3件、奈良県下では田原本町・高取町から2件、そのほか近畿圏では（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター・同志社大学・和歌山県立紀伊風土記の丘から7件、関東地方では（公財）千葉県教育振興財団から1件、中国・四国地方では鳥根県・大田市・今治市・高知市・（公財）高知県文化財団から10件、九州からは熊本県・宮崎県立西都原考古博物館から2件、合計で25 [23] 件の保存処理事業を受託した。以上の保存処理・分析業務の受託額は約1,890万 [約4,030万] 円であった。

## (3) 文化財関連施設の管理事業

大阪市埋蔵文化財収蔵倉庫（平野区）・東淀川調査事務所（東淀川区）・西淀川収蔵倉庫（西淀川区）・常吉収蔵庫（此花区）で恒常的な出土遺物の管理を行い、約1,500箱の遺物収納コンテナの移動や整理作業による収蔵遺物の系統的な管理を行った。

## 2. 保存科学技術の開発と文化財など実資料への適用

大阪市内発掘調査の出土品に対する保存処理を進め、特に木器については瓜破遺跡出土の鍍金製品や前期難波宮跡出土の斎串など、約700点の処理を終えた。また、大坂城下町跡出土の金箔付土師器、長原217号墳出土の赤色顔料などの蛍光X線成分分析、長原217号墳出土刀子などの金属器の保存処理を行った。これらは報告書でその成果を公表したほか、瓜破遺跡、長原遺跡の地層断面剥取りとともに大阪歴史博物館の特集展示「新発見！なにわの考古2013」をはじめ各展示で公開した。

継続して推し進めている木製文化財に対する保存技術について、国際博物館会議水浸考古遺物保存会議（WOAM）や第3回東アジア文化遺産保存国際会議、日本文化財科学会などで発表を行った。また、中国で行われた第1回木漆器保存修復国際会議に招請され講演したなど、国内外から評価を得た。

## 3. 文化財に関する研究

科学研究費助成事業として基盤研究（A）・（B）・（C）の3件（1,030万円、間接経費含む）が採択された。基盤研究（A）では発掘調査で得られた古地理・古環境に関するデータを

網羅し、地理情報システム上で遺跡の時間的・空間的な解析を図るほか、考古学や文献史学など多方面から上町台地の総合的な歴史研究を進めた

(<http://osaka-uemachi.sakura.ne.jp/>)。最終年度にあたる平成25年度は、5年間にわたる研究の総括として「大阪上町台地から都市を考える」と題した講演会・シンポジウム・報告・ポスターセッションなどを2日間にわたって開催し、成果を総合的に公表した。さらに、地理情報システムを通じて蓄積された過去の調査データの研究は、発掘地点における遺跡の時代や遺構の性格を予測することを可能にしつつある。

また、基盤研究(B)では考古学と社会との関連性をテーマに、海外の動向を紹介するためスウェーデンから考古学者を招聘して大阪で講演会を開催した。基盤研究(C)では保存科学を題材に研究を継続し、海外でもその成果が認識されるようになった。海外との交流では、ほかにも大韓民国(財)嶺南文化財研究院との友好協定に基づいて、学芸員3名が財団本部や調査事務所・発掘現場などを視察し、文化財や調査技術などに関する情報交換を行った。

また、個々の学芸員の研究成果を公表するため、大阪文化財研究所『研究紀要』第15号を刊行した。

#### 4. 教育・普及事業

##### (1) 展示などをはじめとする資料活用

大阪歴史博物館と共催で特集展示「新発見！なにわの考古学2013」を開催し、平野区瓜破遺跡の弥生時代前期末の土器群、長原遺跡の弥生～古墳時代墳墓の土器群、難波宮跡出土の古代木製品、「ものづくり」のまち近世大坂を示す手工業品など約250点を発掘現場の写真や図解で紹介した。そのほか古代・近世の常設展示の更新などで連携した。

このほか、恒例行事である平野区「古代市」に合わせ、「古代のクラフト展」を大阪市立クラフトパークで開催して長原遺跡の古墳時代資料を展示し、また市内各地の公共施設や民間施設に設置された展示施設「街角ミュージアム」では、展示箇所を増やし35箇所1,786点の出土品を通年で公開した。

さらに、全国の博物館・美術館などの借用申請に対応した出土品は22件362点、出版目的で提供した写真・図面は74件284点、資料調査や見学への対応は28件であった。

##### (2) 講座などによる教育普及や人材育成

発掘調査の成果を直接知ってもらうため、現地説明会(難波宮跡1回、大坂城跡2回、合計14,930人)を行った。特に3月は豊臣大坂城の石垣を公開し、3日間で1万人以上の参加者を得、大いに注目された。大阪歴史博物館と共催で研究所学芸員による「金曜歴史講座」や「新発見！なにわの考古学2013」展の関連行事である「大阪の歴史を掘る講演会」を開催した。

そのほか、「平野区歴史講座(大阪市コミュニティ協会)」、「平野住民大学講座(平野区画整理記念会館)」、「いちよう大学(大阪市教育振興公社)」、「すみよし北講座(市民交流センターすみよし北)」など他団体が主催する市民向け連続講座の企画や講師派遣を行った。また、考古学や文化財の研修や教育課程の講師として、埋蔵文化財調査機関や大学に学芸員を派遣した。

### (3) 地域と連携したイベントなどの共催・出張展示

文化庁の補助金事業である「地域の博物館や文化資源を活用した「上町台地」の魅力発信による観光振興・地域活性化事業」の最終年度として、「難波宮フェスタ2013」で講演会やワークショップを、「なにわの宮リレーウォーク」で文化財探訪イベントを行い、年度末には各団体による報告会を一般公開した。これらはNPOやボランティアガイドなど市民団体と協働した。また、同事業で制作した文化財見学サイト「なにわ まナビガイド」にはボランティアガイド団体の活動紹介メニューを作り、各団体が自らイベント案内や活動情報を更新するなど、さまざまな情報発信の機会を設けた。そのほか、平野区長吉地域の市民と協働した「古代市」などでもワークショップや展示解説を行い、文化財の教育普及に努めた。

### (4) 体験活動事業

難波宮史跡整備調査において、大阪市内の小学児童を対象とした体験発掘事業を大阪歴史博物館と共同で行い、8校450人が参加した。遺跡を発掘し、出土した資料に直接に触れることができ、児童・教師ともに好評であった。

### (5) 情報発信

発掘調査や出土品、シンポジウム開催など文化財に係る新聞報道（8回）、文化財情報誌『葦火』を年6回（163～168号）各1,500部刊行した。定期購読者は116 [127] 人であった。ホームページでは講座や現地説明会などのイベント、報告書や研究紀要、『葦火』などの出版情報に加え、現地説明会資料など文化財に関する情報を公開した（接続76,523 [56,503] 件／累計596,516件）。また、文化財見学サイト「なにわまナビガイド」は約7,100人の利用者があり、そのうち1,420人がリピーターで文化財や遺跡見学に活用された。25年度は海外からの来阪者に活用してもらうため、文化庁の補助金を得てハングル版・中国語版サイトを制作・公開した。

### (6) 関連資料の収集・管理

図書は交換・購入により6,370 [3,224] 冊を登録し、登録台帳のデジタル化を進めた。研究所図書は85,500 [79,130] 冊で、外部からの閲覧希望にも対応した。

### (7) 他団体との連携

6年目となった全国埋蔵文化財法人連絡協議会の近畿ブロック（13団体）主催の「関西考古学の日2013」に参画し、講演会「ヤマト王権と地域首長」（長岡京市）を開催したほか、リーフレットによる共通広報、スタンプラリーなどを行った。

## 5. 博物館・美術館との連携

発掘調査の出土品と研究成果を活用し、特に大阪歴史博物館との展示や関連行事で連携を重ね、大阪市立美術館の特別展「再発見！大阪の至宝」でも展示や連続講座などで連携した。そのほか、「ミュージアム連続講座2013」や「てくてくミュージアム」関連展示・「学芸員のおすすめコレクション」展に参加した。

また、大阪市立大学との博学連携事業であるシンポジウム「難波宮と大化改新」、連続講演会「大阪城の地中を探る」の開催に参画、協力した。

## 6. 東日本大震災復興支援

文化庁および福島県の要請に応えた大阪市の依頼を受けて、当協会から東日本大震災復興支援の埋蔵文化財調査に担当者1名を1年間、(財)福島県文化振興財団へ派遣し、地域の貴重な文化財の保存と活用に寄与した。これにより平成26年3月に大阪市教育委員会から感謝状を授与された。

### 3 大阪歴史博物館管理運営事業

特別展では話題性のある自主企画展の開催・巡回の取り組みに一定の成果をあげたほか、アニメ・マンガを素材とした展覧会を開催し、新たな方向性を積極的にさぐった。近年増加する外国人来館者に対応するため、常設展示で外国語キャプションの充実に着手したほか、英語による展示の広報を開始し(HP・展示予定表)、博物館情報の幅広い発信に取り組んだ。

#### 1. 資料の収集、保管事業 (〔 〕は昨年度)

購入資料として辛基秀コレクションの「瀟湘八景図屏風 南溪筆」を含む5点を収蔵した。寄付資料に関しては、資料収集方針にもとづき、中村順平関係資料など、歴史資料199点、美術資料144点、考古資料3点、民俗資料4点、芸能資料256点、建築資料213点、合計821点〔2,036点〕を整理・燻蒸し、収集・保管した。この結果、当館で保管する館蔵品は124,200点〔123,374点〕に達した。また館蔵資料の一部について必要な修復や保存処理を行った。

#### 2. 展示事業

##### (1) 常設展示

常設展示「都市おおさかの歩み」では、重要文化財の家形埴輪などのほか、久留米藩蔵屋敷図屏風や新世界・通天閣関係資料など、各フロアにおいて特別展と関連した資料や話題性のある資料を考慮して館蔵品・寄託品を適宜更新するなど、年間36回の展示替えに努めた。また7階では、港区役所との共催事業に関連して柳原良平氏の天保山・築港ゆかりの作品を展示するなど、常設展示の話題性づくりにも努力した。特別展の多くが好評を得たこともあり、本年度の常設展の入場者は前年度比8.61%増の226,808人〔208,831人〕となった。展示解説は、土曜・日曜・祝祭日に実施し、1,336人〔1,502人〕の参加を得た。

##### (2) 特集展示

特集展示室では、大阪市内の最新の発掘成果を紹介した「新発見!なにわの考古学2013」や博物館の資料収集・保存活動を紹介した「修復品・新収品御披露目展」のほか、「新発見資料からみる江戸時代の道頓堀」・「御所人形の世界」・「幕末大坂の絵師 藪長水」など館蔵品・寄託品を活用した展示、大阪の風のコレクションを紹介した企画展など、年間9本の特集展示を開催し、大阪の歴史と文化の情報発信と再評価に努めた。

##### (3) 特別展示・特別企画展

特別展は、本年度4本を開催した。内訳は自主企画展が1本、巡回展が3本であった。

自主企画展「戦国アバンギャルドとその昇華—変わり兜×刀装具」(平成25年11月2日～12月8日 開催日数32日間)は、戦国時代から江戸時代の変り兜および刀装具をアートの観点から展示した。全国から集まった優品とユニークな変わり兜に注目が集まり、高い評価を受けた。佐野美術館への巡回をおこなった点も大きな成果であった。

巡回展「幽霊・妖怪画大全集」(平成25年4月20日～6月9日 開催日数45日間)は、日本人の生死観がうかがえる絵画作品を集めたもので、近年の妖怪ブームを背景に多くの観覧者を得た。また大阪ゆかりの幽霊・妖怪を紹介する特設コーナーを設置し、大阪会場独自の工夫を加えた。

巡回展「エヴァンゲリオンと日本刀展」(平成25年7月3日～9月16日 開催日数66日間)はサブカルチャーと伝統工芸のコラボレーションという斬新な切り口の展覧会で、大きな話題を集めた。海外からの来館者も目立ち、新たな展覧会の方向性を試みるという点で有意義な機会となった。

巡回展「手塚治虫×石ノ森章太郎 マンガのちから」(平成26年1月15日～3月10日 開催日数48日間)は東日本大震災をきっかけに企画され、マンガが持つ社会的・文化的影響力を紹介することを目的とし、大阪ゆかりの手塚治虫の初公開資料なども展示され、話題を集めた。25年度の特別展は「幽霊・妖怪画大全集」展・「エヴァンゲリオンと日本刀」展、「戦国アバンギャルドとその昇華—変わり兜×刀装具」展が好評を博し、本年度特別展の観覧者は合計189,422人〔100,366人〕で、昨年度比88.7%の増加となった。

特別展示室の有効活用を目的とする特別企画展(常設料金)としては「生誕100年記念 織田作之助と大大阪」(平成25年9月25日～10月18日)を開催し、戦前のおお阪を代表する作家織田作之助の人生と文学を、彼を育んだ「大大阪」という時代背景とともに紹介した。時宜を得た企画として、9・10月ともに昨年度同月の常設観覧者数を上回った。

### 3. 調査・研究事業

難波宮と大阪学の研究を2本柱とし、「難波宮研究史-研究文献目録の作成-」、「新出安井家文書の研究」、「高島多米治と下郷コレクションについて—余山貝塚資料—」の3課題の共同研究を実施した。また基礎研究としては、「船大工長谷川家文書の研究」、「中村順平の建築作品に関する研究」、「大阪と江戸・東京との都市比較史研究」の3課題を実施した。研究成果については「研究紀要」などで発表し、「なにわ歴博講座」などをとおして市民に還元した。また昨年度まで実施していた共同研究「大阪の近代美術工芸—明治維新から昭和戦前期へ—」の成果を「共同研究報告8」として刊行した。外部資金による研究では、科学研究費補助金208万円〔349万円〕を獲得し、基盤研究(C)2本、若手研究(B)1本を行った。

また難波宮研究の一環として、大阪市教育委員会・大阪文化財研究所と共同で史跡難波宮跡公園東側において実施した発掘調査では、後期難波宮の東方官衙地域で、1954年の第2次調査で発見されていた建物土壇の南半部にあたる遺跡を確認した。

### 4. 教育・普及事業、学習支援

教育普及事業としては、市民の歴史学習を支援するため、金曜夜間の学芸員による「なにわ歴博講座」や大阪文化財研究所との共催による「金曜歴史講座」のほか、上町台地をテーマにした科研や道頓堀に関するシンポジウム、歴史的な街道と遺跡を訪ねる「なにわ考古学散歩 大阪のウォーターフロントを歩く」や「大坂町あるき」などの見学会、そして「第9回大阪アジア映画祭」「2013優秀映画鑑賞会」といった映画関係の事業を実施し、多彩なメニューを市民に提供することができた。また各特別展や特集展示においても、関連の内容でシンポジウム・講演会・講座・見学会・コンサート・ワークショップ・展示解説など多くの行事やイベントを開催した。これらの事業は合計171回を実施し、総計13,097人の参加者を得た。

子どもを対象とした「わくわく子ども教室」では、「歴史講座と体験発掘」を3日間開催して49人〔105人〕の参加があり、常設展8階では毎月第1土曜の「むかしの瓦の拓本体験」と「土

人形マグネット作り」に、年間286人〔275人〕の参加者があった。また、季節に合わせて開催した夏の「綿くり・糸つむぎ体験」には2日間で151人〔187人〕、正月の「凧づくりと凧あげ」には25人〔23人〕の参加者を得た。毎月2回、1階のエントランスでおこなう「手作りおもちゃで遊ぼう」はおもちゃ作りサポーターによる協力のもと23回実施し、2,050人〔2,005人〕の参加者があった。

ボランティア事業は、市民参加型博物館をめざす事業の一環として開館時から導入しているもので、今年度は216人が登録し、活動は、難波宮の遺跡をめぐるガイドツアー、常設展示での子どもスタンプラリー、古代衣装・江戸時代の両替商体験・明治の双六遊びなど6種のハンズオン、8階の「歴史を掘る」コーナーでの考古学の体験学習を実施したほか、季節の企画として「浪花百景具合わせ」で遊ぼう！に取り組んだ。さらに「iPadで楽しむ難波宮遺跡探訪」「石組水路の一般公開」への協力もおこなった。ボランティアの活動は休館日と研修日を除き年間307日で、延べ6,523人〔5,654人〕が活動を行った。なお、ボランティア活動の充実と来館者対応の向上を目的に、5月から3月にかけて講習会、他施設の見学会、懇談会・班別交流会など、年間14回の館内・館外研修等を実施した。

学習支援関連では、司書・学芸員が常駐する2階の学習情報センター「なにわ歴史塾」で、自由に閲覧できる映像ソフト約100本と図書約6,000冊を中心に、館内外から検索できる書庫内図書約12万冊も活用しながら、大阪の歴史や文化に関する市民の学習相談に応じた。さらに特集図書コーナーを年間5回設定し、塾の活性化と図書利用の推進に取り組んだ。

また、区役所や生涯学習施設等からの依頼に応じて学習会等の講師を派遣した。

## 5. 学校・市民等との連携

学校連携としては、教員研修、中学生等の職場体験・職業講話、小学校高学年の発掘体験のほか、大学生の博物館実習の受入を行った。

教員等の研修では、大阪市教育センターとの共催で、「大阪市教員研修」(30人)を実施した。中学生等の職場体験・職業講話は、5校14人〔4校50人〕を受け入れたほか、修学旅行等で当館を訪れる小中学生グループからの学習相談にも応じた。体験発掘は、11月11日から18日にかけて大阪市小学校社会科研究会の協力を得て、8校450人〔6校276人〕を対象に実施した。大学生の博物館実習は8月後半に延べ12日間で12大学42人〔12大学45人〕を、また博物館見学研修については604人〔520人〕を受け入れた。なお小中学校による団体利用は、小学校447校〔446校〕、中学校205校〔186校〕、そのうち大阪市立の小学校211校〔221校〕、中学校69校〔56校〕である。全体としては増加傾向にあるが、大阪市内の小中学校については若干の減少が見られた。

市民等との連携では、上町台地を拠点に活動するNPO法人まち・すまいづくりとの共催で「うえまちコンサート」を開催した。またNPO法人OSAKA ゆめネットとの共催で、難波宮の発見者である故山根徳太郎博士の命日にちなみ、7月28日に「難波宮フェスタ2013」として講演会・ワークショップ・石組み遺構特別公開などを開催し、2,854人〔1,555人〕の参加者を得た。

## 6. 情報発信、広報宣伝

情報発信、広報宣伝については館事業を広く周知し、館利用者の増を目的として積極的に

取り組んだ。館の存在の周知を徹底する目的から、地下鉄車内における案内放送を通年で実施するとともに、外国語による情報提供の充実のため英文年間行事予定表の制作と、英語による特別展概要・主要作品紹介をHPにアップした。web関係ではHPに展示・普及事業にかかわる案内をすべて掲載し、年間で463,252件〔328,718件〕のアクセスがあった(1日平均1,269件、前年度比140.9%)。なお、利便性向上のためにHPのリニューアルも実施した。また「モバイルサイト」や「なにわ歴博ブログ」の活用、なにわ歴博カレンダー(4回各2万部)、子どもを対象とした「なにわれきはく新聞」(4回各1万2千部)などの紙媒体の発行も継続し、多様な層への情報提供に引き続き取り組んだ。

## 7. 来館者サービスの向上

利用促進を図りながら来館の楽しみを感じてもらおう目的で「大阪歴史博物館スタンプカード」制度を実施した。展示を観覧するとスタンプの押印が受けられ、スタンプが6個集まると小冊子『展示の見所』などと引き換えられる特典があり、今年度は866人の引き換えがあった。また、館内のレストランとの連携により特別展観覧者への入館割引または飲食割引のサービスを実施している。今年で4年目を迎えた大阪城天守閣とのセット入場券(常設のみ)は、両館で25,834枚(前年度比109%)を販売し、着実に利用者を増やした。

## 8. 施設の維持管理

建物設備の維持保全のため空調をはじめとする電気、機械設備などの機器・装置の日常点検のほか、定期メンテナンス、法定点検などを実施し良好な施設設備の維持に努めた。また経年劣化等による機器の不具合に対応し、空調関係機器の消耗性部品の交換、送風機のオーバーホールを行った。蒸気配管の劣化については大改修が課題となっているが、4カ年計画で24年度に改修に着手し、2年目の本年度は北側還管の改修を実施した。その他の系統については、部品交換等応急的な補修により蒸気漏れ等の故障に対応した。老朽化に伴う保守困難や障害が頻発していた館内ネットワーク機器は、最低限の更新整備を行いシステム運用の安定化を図った。

入場券の発券業務については機械化により、業務のスピード化を図り、お客様より好評を得ている。また、館内外の日常的な清掃に努め、カーペットクリーニングなどの定期清掃を実施し、建物の美観を保つように図った。

防火・防災に関しては当館、NHK大阪放送局、ビル管理会社が一体となった訓練を行い、非常時の対応について三者で確認を行った。

## 9. 友の会 その他独自事業

自主運営団体である友の会については、5月に総会が開催されるとともに、3月の臨時総会で自主運営化への実務が完了した。事業としては「史跡をめぐる」「街道を歩く」をテーマとした見学会など、計5回が行われ、185人の参加者があった。なお当館は、事業の企画や講師の派遣などをとおして友の会の活動支援を行った。

その他、独自の事業として、ジュンク堂書店大阪本店で、展示図録等の常備販売を実施している。

## 4 大阪市立自然史博物館管理運営事業

平成 25 年度は年度をまたいで開催した特別展を含めて、3 回の特別展を開催した。主催展として開催した「いきものいっぱい 大阪湾」展は、準備段階(調査研究、資料収集)および展示資料整備に直接開催経費の 2 倍以上の外部資金を投入することにより、マッコウクジラ骨格の組み立て標本など、展示内容のクオリティアップに役立った。マッコウクジラを展示の“目玉”としてアピールすることで、「愛称募集」、「愛称決定、命名式」など広報も幅広く展開できた。入館者数は目標を上回ることはできなかったが、2 万人以上の入場者を迎えることができた。過去に開催した地域調査型特別展(淀川展など)に比較すると 2 倍の入場者があり、過去の総括・反省を踏まえて、タイトルを工夫するなどした結果と考えている。

### 1. 資料の収集、保管事業

動物・植物・昆虫・化石・岩石・鉱物等の資料を、大阪を中心に日本全国、さらに必要に応じ海外からも収集してきた。収集した標本は低温燻蒸などを実施した後、温度湿度管理が可能な収蔵庫において、資料ごとに最適な環境で保管し、展示・研究活動に活用している。この数年間、新規資料は主として寄贈によって増加している。25 年度に寄贈を受けた主なコレクションは以下の通りである。

東京湾のベントス (500 点)、サイなどの飼育哺乳類 (天王寺動物園、17 点)、等脚類パラタイプ標本 (6 点)、国内外産コメツキムシ (512 点)、ベトナム産コガネムシホロタイプ (3 点)、新潟県産直翅類など (11712 点)、吉見昭一氏旧蔵標本一式、児玉氏コケ類標本、中島氏標本一式、旧大山田村服部川河床産 脊椎動物化石 (41 点)、日本産を中心とした化石標本一式。

平成 25 年度末の総資料数は 152 万 5752 点である。(昨年度末比 10,394 点の増加)

### 2. 展示事業

平成 25 年度の常設展、特別展を合わせた総入館者数は、309,564 人 (常設展 197,734 人、特別展 111,830 人)、うち有料 117,914 人であった。常設展入館者は前年度比 39,446 名減。

#### (1)常設展示

平成 25 年度には「マッコウクジラ全身骨格のつり下げ展示」と「第 5 展示室映像機器の補修」を行うとともに満足度向上もめざして「ジオラボ」・「子どもワークショップ」・「ミニワークショップ (たんけんクイズ)」等の館内行事を実施し、来館者サービスに努めた。

#### (2)特別展

##### ①第 44 回特別展「いきものいっぱい大阪湾 ～フナムシからクジラまで～」

<会 期> 平成 25 年 7 月 20 日 (土) ～10 月 14 日 (月・祝)

当館では大阪湾の自然をモニタリングするために、生き物を中心とした調査研究や普及啓発活動を継続してきた。一方で、地域の人々による普及活動や連携による生き物の一斉調査など、活発な活動、国の機関や地方自治体による、豊かな海を回復し、市民が誇りうる大阪湾を創出する活動も行われている。これらの活動を通じて蓄積されてきた標本や情報を取りまとめ、大阪湾の過去と現状を知ってもらい、これからの大阪湾を考えてもらう特

別展を開催した。今回は大阪湾沿岸の博物館・水族館7施設（神戸市立須磨海浜水族園、西宮市貝類館、海遊館、大阪南港野鳥園、大阪市立自然史博物館、きしわだ自然資料館、貝塚市立自然遊学館）による「大阪湾 Years 連携企画展」の一環でもある。この特別展のための調査研究、資料収集、並びに開催にあたっては、日本財団助成事業「船の科学館・海と船の博物館ネットワーク」および科研費による助成・支援を受けた。

②「発掘！モンゴル恐竜化石」展（読売新聞大阪本社と実行委員会を組織し開催）

＜会 期＞平成24年11月23日（金・祝）～25年6月2日（日）

（159日間、うち平成25年度は55日間）

モンゴル・ゴビ砂漠は1920年代に、アメリカの調査隊が恐竜の卵の化石を発見したことから、世界でも有数の恐竜産地として知られるようになり、その後も続々と、世界を驚嘆させる化石が発見されてきた。この特別展で展示する標本は、日本とモンゴルの共同調査隊が発掘した標本をはじめ、ほとんどが“実物化石”で、日本初公開のものも多く含んでいる。300点以上の展示標本によって、イントロダクション、ゴビ各地の化石産地ごとの特徴、そして「恐竜という生き物をさぐる」の3コーナーによって紹介した。関連イベントも多数企画・実施し好評であった。

③大阪市立自然史博物館・長居植物園40周年記念企画特別展

「恐竜戦国時代の覇者！トリケラトプス」～知られざる大陸ララミディアでの攻防～（読売新聞大阪本社、中央宣伝企画と実行委員会を組織し開催）

＜会 期＞平成26年3月21日（金・祝）～5月25日（日）（うち平成25年度は11日間）

大阪市立自然史博物館は昭和49年に西区靱2丁目（元靱小学校）から長居公園に移転、また長居植物園は昭和49年の開園からともに40周年を迎えたことを記念して特別展を開催した。

恐竜時代の最後・後期白亜紀に北アメリカ大陸の東西の分断によって出現したララミディア大陸をクローズアップすることで、そこを舞台に多様化し、繁栄していった植物食恐竜トリケラトプスの仲間の起源と進化の謎に迫っている。日本初公開となる多数の新しい標本を用いて、トリケラトプスの仲間の起源から絶滅までの歴史を、多彩な骨格標本や生態復元モデルを通じて分かりやすく描いた展示を行った。

(3)特別陳列等

①特別陳列ミュージアムウィークス大阪2013 もっと！お宝大公開

「粉川昭平コレクション -植物化石研究の実物教科書-」

＜会 期＞平成25年10月29日（火）～12月8日（日）

古植物学者（故）粉川昭平氏の経歴・研究を紹介するとともに、粉川コレクションの中から、代表的なもの、特徴的なものを展示した。また、コラム展示として、宇井縫蔵鮮苔類コレクションを本館2階 イベントスペースで展示した。

②ミニ企画展「平成の大津波被害と博物館巡回展 ナチュラリスト鳥羽源藏と後継者たちの残したもの」

＜会 期＞平成25年8月24日（土）～10月14日（月・祝）

この展示は岩手県立博物館、昭和女子大学光葉博物館で開催された「平成の大津波被害と

博物館」を基礎とし、その自然史パートを標本・パネル共に拡充して開催したものである。本館 2 階 イベントスペースで展示した。

③ミニ展示「植物標本のタネは地域の自然を救う!？」

～時を越えて発芽する植物標本のタネ～ 監修：新潟大学教育学部植物学教室

大阪市立自然史博物館の標本庫には、都市化などによって現在では失われてしまった植物の標本を数多く保管している。今回の展示では、当館元学芸員で新潟大学教育学部の志賀准教授の科学研究費による研究成果を元に、博物館標本を用いた新しい生物保全の可能性について、本館 2F 第 5 展示室出口において平成 26 年 3 月 15 日（土）～5 月 31 日（土）に展示した。

④ミニ展示「270 万年前に出現したクロマツ～日本列島に生育するクロマツの起源を解明～」

金沢大学と共同で行ったマツ属の化石研究において調査したクロマツの化石とオオミツバマツの化石（いずれも三木茂コレクション）をナウマンホールにて、平成 26 年 1 月 25 日（土）～5 月 25 日（日）に展示した。

### 3. 調査研究事業

調査研究は博物館活動の根幹をなすものであり、学芸員の個別テーマによる研究をはじめ、平成 26 年度の特別展開催に向けて市民と協同で進める「大阪を中心とした都市の自然プロジェクト調査」、25 年度の特別展準備を兼ねた「大阪湾の総合調査」などを実施してきた。その成果は特別展「いきものいっぱい 大阪湾」で紹介し、館で刊行する研究報告や学会誌で公表するとともに、講演会を通じて市民に普及した。

25 年度は外部研究資金として文部科学省科学研究費補助金は基盤研究 6 件（基盤研究 A 1 件、B 2 件（内研究分担者として 1 件）、C 4 件）、若手研究 3 件の補助を受けた。民間ファンドでは、全国科学博物館活動等助成事業、笹川科学研究奨励賞による研究助成も各 1 件採択された。

### 4. 教育・普及事業

市民が自然をより深く理解するためには、展示を見るだけでなく、野外で実物の自然に触れることも重要である。自然史博物館ではこのような観点から、多様な博物館利用者とその要望に応えるため、各種の普及行事を行っている。これら普及教育事業の開催は 218 回、参加者総数は 30,527 人であった（詳細は別紙資料編に掲載）。

また、行事の実施に際しては、自然史博物館のボランティアである補助スタッフの協力を得ている。

### 5. 学校・市民等との連携

「総合的な学習の時間」に応用できるテーマで、学校教員や教員を目指す大学生・自然観察会指導者を対象とした「教員・観察会指導者向け支援プログラム」を計画的に実施できた。学校向けには、展示解説や標本など博物館資料の貸出し、学校教育を支援してきた。また 8 月 7 日には「教員のための博物館の日」を、一般財団法人全国科学博物館振興財団による平成 25 年度全国科学博物館活動助成を受けて開催した。

友の会会員を中心に 200 人以上の市民が参加するプロジェクトU「都市の自然・生物相」調査の取り組みを始めている。「NPO大阪自然史センター」との連携により、博物館事業の充実にも努めている。

## 6. 情報発信、広報宣伝

インターネット導入後に開設したホームページは、ジャストタイムで内容豊富な情報発信に努めている（平成 25 年度のHPアクセス数（トップページ）は約 42 万件）。HP掲載の新着情報を中心に「Twitter」、「Face Book」を通じて情報提供するなどしている。Twitter のフォロワー数は約 3,500（1,650 の増）、Face Book は 649 人がチェックインし「いいね！」は 350 人であった。また特別展の内覧会には、特別展を宣伝協力いただくブロガーを招待し市民参加型の広報を実施した。

地下鉄車内ガイド放送（最寄り駅案内）を実施し、特別展開催時は特別展情報を、それ以外の時期は常設展を案内し、広く博物館の存在を沿線住民へ周知することができた。

## 7. 来館者サービスの向上

「花と緑と自然の情報センター」には、図書閲覧・情報検索・標本閲覧・ビデオ閲覧のコーナーがあり、学芸員を配置して質問等にも対応し、多くの市民の学習の場になっている。また、本館ミュージアムサービスセンターには教育スタッフを配置して学校対応や市民サークルへの窓口になった。常設展では、来館者向けイベントの「ジオラボ」「子ども向けワークショップ」「自然史博物館探検クイズ」を実施し、多くの来館者から好評を得ている。

来館者アンケート結果に基づいて来館者向けサービス改善点の洗い出しを行い、JR 長居駅からのアクセス看板設置、長居公園内路面標示新設などを長居パークセンターと共同で実施した。また花と緑と自然の情報センターから本館常設展示へのアクセス改善（新改札設置）について試行実施した。

## 8. 施設の維持管理

警備・案内・券売・清掃及び設備等の保守点検を外部委託し、安全・快適な施設の維持管理に努めてきた。職員による日常的な安全点検を励行するとともに、職場安全衛生委員会の職場巡視も行っている。防災対策では、隣接の長居パークセンターと協働で消防・防火訓練を実施し、協業体制の充実を図った。平成 25 年度は管理棟エレベーターの更新、展示棟外壁の補修工事、展示棟屋上防水補修工事を実施した。

## 9. 友の会

自然史博物館友の会（25 会計年度は 1,723 名）は、昭和 30 年に大阪市立自然科学博物館後援会として発足した当初から、博物館と連携しながら市民と博物館をつなぐ役目を果たしてきた。その自然史博物館友の会を母体として平成 13 年には「NPO 大阪自然史センター」が発足し、現在は大阪自然史センターが友の会を運営している。

友の会会員は、友の会が主催する行事に参加するだけでなく、博物館が開催する各種の普及教育事業にも積極的に参加し、行事を盛り上げてくれている。また友の会行事は積極的に

公開し、一般の人々の参加も可能にしているのも、参加者の満足度も高く、友の会への関心を高めることができた。

11月16-17日には「大阪バードフェスティバル2013」を大阪自然史センターと共催し、2日間で16,200人が参加し市民の自然に対する興味を深め、関心を高めた。

## 5 大阪市立美術館管理運営事業

美術館では、展覧会にかかる事業が中心となって全体の事業が展開する。

平成 25 年度は、春に海外にある日本美術コレクションの中で世界一の規模と質を誇るボストン美術館の所蔵品による特別展「ボストン美術館 日本の至宝」の開催が特筆される。

近年若い世代にも人気の高い曾我蕭白の作品をはじめ、奈良～鎌倉期の仏教絵画や彫刻、平安～鎌倉の絵巻、長谷川等伯、尾形光琳、伊藤若冲などの名品を紹介した。総入館者が 24 万人を越え、有料率も非常に高く推移した。

秋には館蔵の中国石造彫刻を中心に、国内に收藏される主要な優品を一堂に展覧した特別展「北魏 石造仏教彫刻の展開」を開催した。当館の所蔵品である山口コレクションと小野コレクションの中国石造彫刻の優品の数々を強くアピールすることができた。

また、秋には特別展「再発見！大阪の至宝 コレクターたちが愛したたからもの」を協会組織全体で取り組んだ。5 博物館施設・1 研究所が所蔵する個人収集家由来のコレクションなどを中心に、私立美術館の所蔵品も拝借し、大阪らしいコラム的な展示も加えて、約 160 件の名品の数々から大阪や関西の特性を浮き彫りにすることができた。

さらに、近年館蔵品・寄託品を用いたコレクション展（平常展）の充実が指摘されるようになり、コレクション展の中で大きくテーマを持たせて開催する特集展示を本年は 4 回実施した。

### 1. 資料の収集・保管事業

- ・ 遼代の工芸品 3 件、漆工芸作品ほか 17 件、中国陶磁器など 24 件、富岡鉄斎作品 1 件などの寄付申出作品に関する書類の整備を行い、評価の準備を行った。
- ・ 寄託作品は 8 件を受入れ、14 件を返戻した。
- ・ 国内外の美術館・博物館に 38 件（170 点）の作品を貸出し、出版社などに作品写真を 71 件貸出した。

### 2. 展示事業

#### (1) コレクション展（平常展）

美術館所蔵のコレクションの中から、日本、中国等の東アジアの作品を中心とした展示を特別展と併設して 6 回、196 日開催した。

年間を通したそれぞれのテーマについては、陶芸家・富本憲吉の世界、中国工芸、絵の中のぼくの夏、ミュージアム・コレクション、など 12 テーマである。

コレクション展のみの入場者は延べ 33,688 人であった。

- ・ 特集展示（コレクション展の中で、特に大きくテーマを持たせて 1 フロア一規模で開催する展覧会）

#### ① 「たっぷり見たい屏風絵Ⅱ」

（平成 25 年 8 月 6 日（火）～平成 25 年 9 月 1 日（日）24 日間開催）

山水ノ間、武家ノ間、花鳥ノ間、源氏ノ間の 4 章で展覧会を構成し、あでやかな極彩色の花鳥画から静けさをたたえた水墨山水画、源氏物語まで、近世屏風絵の世界を紹介した。

#### ② 「根付と装身具」

(平成 25 年 9 月 7 日 (土) ~平成 25 年 10 月 14 日 (日) 33 日間開催)

今回は、男性装身具である根付を中心に、印籠、煙管筒、そして女性装身具から櫛・笄・簪・など、江戸時代から明治にかけての作品を小袖衣裳や蒔絵調度と合わせて展示した。

③「古代イタリアの陶器とコプトの染織・彫刻」

(平成 26 年 1 月 5 日 (日) ~平成 26 年 2 月 11 日 (火・祝) 32 日間開催)

イタリア国立ルイジ・ピゴリーニ先史民族博物館との交換寄贈品を中心としたエトルリアをはじめとする古代イタリアで作られた陶器とエジプトのコプト教徒(キリスト教)による染織・彫刻を中心に展示した。

④「とおくてちかいー仏教美術ー」

(平成 26 年 1 月 10 日 (金) ~平成 26 年 2 月 11 日 (火祝) 28 日間開催)

弥勒の住む浄土を描いた兜率天曼荼羅図、雲間をただよう飛天像などまだ見ぬ仏国土の諸尊と情景を表した絵画・彫刻・工芸の展示を通じて、人々が抱き続けた往生への憧憬を紹介した。

(2) 特別展

①ボストン美術館 日本美術の至宝(平成 25 年 4 月 2 日(火)~平成 25 年 6 月 16 日(日)までの 67 日間、観覧者数 242,725 人)

ボストン美術館は、東洋美術の殿堂と称され、100 年以上にわたる日本美術の収集は、海外にある日本美術コレクションとしては、世界随一の規模と質の高さを誇っており、その中から厳選された約 70 点を紹介する展覧会「ボストン美術館 日本美術の至宝」を大阪市立美術館、ボストン美術館、NHK大阪放送局、NHKプラネット近畿、朝日新聞社の主催により開催した。修復を終え、世界初公開となる曾我蕭白の最高傑作「雲龍図」をはじめ、長谷川等伯、尾形光琳、伊藤若冲などの名品も揃い、かつて海を渡った、まぼろしの国宝とも呼べる日本美術の至宝を紹介した。

②第 59 回全関西美術展(平成 25 年 7 月 9 日(火)~7 月 21 日(日・祝)の 12 日間、観覧者数 5,767 人)

全関西美術展は、昭和 16 年に大阪市民の芸術振興を目的として、公募による総合芸術展「大阪市展」として発足し、現在は、読売新聞社と共催し「全関西美術展」として開催している。今年度は 797 点の応募があり、503 点が入選し、無鑑査・招待作家の作品を含めて 852 点の作品を展示した。

③北魏 石造仏教彫刻の展開(平成 25 年 9 月 7 日(土)~10 月 20 日(日)の 38 日間、観覧者数 7,839 人)

国内に収蔵される主要な優品と、山口コレクションをはじめとする館蔵・寄託作品を加えた約 60 点を紹介する展覧会「北魏 石造仏教彫刻の展開」を大阪市立美術館、日本経済新聞社の主催により開催した。仏教が広く中国全土に浸透する中で最も優れた石造彫刻が生み出されたのが南北朝時代の北魏である。1500 年前の北魏に焦点を絞って「仏教の地域性」をキーワードに石造仏教彫刻の優品を展示した。

④再発見!大阪の至宝 コレクターたちが愛したたからもの(平成 25 年 10 月 29 日(火)~12 月 8 日(日)の 36 日間、観覧者数 20,425 人)

大阪は、近現代に経済界の人々が多彩な美術コレクションを形成したが、こうしたコ

レクターたちは、自らの収集品を市民共有の文化遺産と考へて、次代への継承を意識するようになってきた。そうしたコレクターたちの作品の受け皿となったのが、国公立の美術館・博物館であり、コレクター自身を母体とした私立の美術館であった。大阪市立の美術館・博物館も寄贈や譲渡により大型の個人コレクションを受け継ぎ展覧会活動を充実させてきた。

こうした大阪市立の美術館・博物館所蔵の美術作品を一堂に会するとともに、近代大阪のコレクターの収集を母体とした私立美術館・博物館の代表的な作品を加えた約160点の作品を紹介する展覧会「再発見！大阪の至宝－コレクターたちが愛したたからもの－」を大阪市立美術館、(公財)大阪市博物館協会、NHK大阪放送局、NHKプラネット近畿、読売新聞社の主催により開催した。

コレクションを育んだ大阪や関西の特性を浮き彫りにしながら、大都市の欠かせない施設であるミュージアムとコレクションの関係を再考した。

⑤第45回日展(平成26年2月22日(土)～3月23日(日)までの26日間、観覧者数37,532人)

大阪展には全国巡回する基本作品273点に加えて、大阪・奈良・和歌山・兵庫の地元入選作品349点、合計622点を展示した。内訳は日本画95点、洋画107点、彫刻55点、工芸美術77点、書288点で、日展出品作家による作品解説を15回開催した。また、日展作家による作品プレゼント抽選会を毎週土曜日の5回開催した。

### 3. 調査・研究事業

- ・特別展「北魏 石造仏教彫刻の展開」展に関して、山口コレクションの中国石仏の写真撮影と詳細な美術情報の調査・研究を行い、あわせて他館の出品希望作品を熟覧調査をした。また、特別展「再発見！大阪の至宝－コレクターたちが愛したたからもの－」展に関しては、各館の学芸員との連携による作品情報の精査を行い、展覧会の内容の深化に努めた。
- ・平成26年度に開催を予定している特別展「山の神仏 吉野・熊野・高野」に向けて、ポラ美術振興財団と仏教美術研究財団からの助成を昨年度に引き続いて受けることがき、展覧会の出品内容を深化することができた。また、同じく平成26年度に開催を予定している特別展「こども展」、特別展「うた・ものがたりのデザイン」、平成27年度の開催を予定している特別展「二科展」などについても、作品情報の調査・研究を実施した。
- ・『大阪市立美術館紀要』14号を年度末に発行し、当館学芸員2名の論文と1名の作品紹介を掲載した。
- ・平成25年度中に文部科学省による科学研究費対象施設として当館も認められ、平成26年度科学研究費補助事業に3研究を申請した。

### 4. 教育・普及事業

#### (1) インターン研修事業

中国絵画、近世絵画、仏教彫刻・工芸、漆工芸・染織、陶磁器・煎茶文化の5分野について6大学院計7人の研修生を受入れた。内容は館蔵・寄託の収蔵品の作品調査とともに、

コレクション展（平常展）における企画・立案・展示・解説に関する業務を学芸員とともに実施した。

#### (2) 博物館実習

実習生として 22 校から 52 名の大学生を 6 月 28 日（金）～7 月 5 日（金）の 6 日間受け入れて博物館実習を実施した。特別展「全関西美術展」に関する補助作業の実習、および工芸や書画の作品の取り扱いなどの講義・実習のカリキュラム内容で実施した。

#### (3) 記念講演会など（合計 22 回、総参加者数 2,358 人）

- ・特別展「ボストン美術館展」

講演会・レクチャー等 計 7 回実施、外部講師 3 回、当館学芸員 4 回

- ・特別展「第 59 回全関西美術展」

審査員（5 部門 5 人）による審査講評を授賞式とともに実施した。

- ・コレクション展（特集展示）「たっぷり見たい屏風絵Ⅱ」

美術講座 1 回実施、当館学芸員 1 回

- ・特別展「北魏 石造仏教彫刻の展開」

講演会 計 3 回実施、外部講師 2 回 当館学芸員 1 回

- ・コレクション展（特集展示）「根付と装身具」

観賞講座 計 1 回実施、当館学芸員 1 回

見どころトーク 計 1 回実施、当館学芸員 1 回

- ・特別展「再発見！大阪の至宝－コレクターたちが愛したたからもの－」

講演会・美術講座 7 回実施、外部講師 1 回、博物館協会学芸員 5 回、当館学芸員 1 回

- ・第 44 回日展 出品地元作家 16 人による作品解説を 15 回実施した。

#### (4) 普及イベント（合計 3 回、総参加者数 948 人）

- ・特別展「北魏 石造仏教彫刻の展開」

レクチャーコンサートとして、「古琴の調べ」を 9 月 23 日（月祝）に実施した。

- ・特別展「再発見！大阪の至宝－コレクターたちが愛したたらもの－」に併設して、文化連携事業として、能に親しむコンサート「なにわの能物語」を 11 月 16 日（土）に実施した。

- ・第 44 回日展

日展作家プレゼント抽選会 地元作家提供によるプレゼント抽選会を 5 回実施した。

### 5. 学校・市民等との連携

#### (1) 小学校鑑賞授業

11 月 15 日（金）教育大学附属天王寺小学校、12 月 5 日（木）九条北小学校、九条東小学校、九条南小学校、12 月 6 日（金）天王寺小学校に対して特別展「大阪の至宝」において観賞授業を実施し、生徒・教員計 332 名の参加を得た。

#### (2) 障がい者特別鑑賞会

三菱商事株式会社と連携し、普段、美術館等へ行くことが困難な障がい者の方々がゆっくりと鑑賞できる特別鑑賞会を特別展「大阪の至宝」開催時の 11 月 16 日（土）に行い、36 名の参加を得た。

### (3) なにわの日記念コンサート

美術館の地元、浪速区のイベントの一環として、7月27日（土）に第19回うえまちコンサートを開催し、171名の参加を得た。

### (4) 美術館へ行こう

- ・春の親子写生会を5月3日（金・祝）に行い、26人の参加を得た。
- ・夏休みに小中学生を対象とした絵画教室を7月25日（木）～27日（土）と8月1日（木）～3日（土）の2回開催し、それぞれ27人、41人の参加を得た。
- ・冬に大人向けと石膏デッサン講座を12月20日（木）～22日（土）に開催し、10人の参加を得た。

## 6. 情報発信、広報宣伝

美術館ホームページをデザインにすぐれ、より見やすく、即時性のある情報を提供し、展覧会情報等をやさしく説明しながら案内ができるように平成25年4月にリニューアルを行った。平成25年度の美術館ホームページへのアクセス件数は、490,227件であった。

展覧会のポスターやチラシの掲示の協力をいただいているあべの地下街等の民間施設及び各美術館・博物館に依頼しているほか、市営地下鉄の公共広報板への広告の掲出も行った。また、新聞社、放送局と連携し、新聞への記事掲載やテレビ放映に努めた。

また、グーグルアートへの作品画像の提供により美術館の優れたコレクションを世界にアピールできた。

## 7. 来館者サービスの向上

天王寺ゲートから美術館への案内表示やJR天王寺駅の美術館案内看板の設置等、美術館へのアクセスを分かりやすくした。また、館内のトイレ、ロッカー、休憩場所の矢印案内等を増やして来館者により親切な案内板の設置を心がけるとともに、お客様のニーズをくみ上げて、受付での荷物の預かりや障がい者の方の館内案内等を、必要があれば即時実践して、財団ならではのサービスを実施してきた。

## 8. 施設の維持管理

警備・清掃・設備管理及び保守点検を外部委託し、安全・快適な施設の維持管理に努めている。職員による日常的な安全点検も励行した。

経年による設備関係の老朽化が進み、大阪市とも連携しつつ維持管理にあたっている。

## 9. 友の会

友の会ニュースを6回発行し、野外写生会を4回（雨天のため中止3回）、基礎講座を5回開催した。また、友の会の展覧会として、7月23日から28日に夏季展、新春友の会展を2月25日から3月2日の8日間に開催した。

今年度の会員は565人で、昨年度から16人の減となった。

## 10. 美術研究所

美術研究所は、関西を基盤として活躍している質の高い画家が講師として日々の指導を行っている。

絵画コンクールを6回、研究所展覧会を1回、絵画作品批評会を2回、ジョイントセミナーを4回開催し、「美術館へ行こう」として小中学生を対象とした絵画教室を2回、親子を対象とした写生会を1回、大人を対象とした絵画教室を1回開催し、合計104名の参加を得た。入所検定は4月、7月、9月、1月に行い、35名の入所者があった。その結果、平成25年度研究生は144人となり、前年度より2人増となった。

## 6 大阪市立東洋陶磁美術館管理運営事業

平成 25 年度は、特別展「森と湖の国 フィンランド・デザイン」を開催した。フィンランド独自のデザインは、ロシアから独立後の数十年間にインテリア・デザイナーによって誕生し、第二次世界大戦後の復興期に「黄金時代」をむかえた。「生活に美を」とのスローガンのもと、生活用品にも洗練されたデザインを求めた彼らの製作活動には、日本文化の影響が大きく、濱田庄司などの民藝運動とも交流が行われた。本展では、豊かな自然に育まれた工芸の伝統を守ろうとしたフィンランドの工芸史を紹介した。

また、国際交流企画展「定窯・優雅なる白の世界―窯址発掘成果展」では、定窯窯址発掘の最新の資料を展示するとともに、定窯白磁の発展の歴史とその美を紹介した。

### 1. 資料の収集、保管事業

芸術的あるいは資料的価値の高い作品の寄贈受入について推進し、館蔵品の寄附が計 2 件（作品数 27 点、評価額 2,995 万円）あった。

さらに、展示事業や調査研究用として、東洋陶磁その他美術に関する書籍等を収集した。

### 2. 展示事業

#### (1) 常設展示（平常展示）

安宅コレクションの中国陶磁・韓国陶磁、<sup>ヒョンドン</sup>李秉昌コレクションの韓国陶磁、日本陶磁の中から代表的作品を中心に約 300 点をそれぞれ陶磁史の流れに沿って展示した。あわせて、沖正一郎コレクションの鼻煙壺約 100 点を展示し、陶磁器以外にも中国の美術工芸品を紹介した。

また、常設展示に変化と多様性を持たせるため寄贈作品を中心に約 20～30 点をテーマ・ジャンルごとに企画構成する特集展示を次のとおり開催した。

「海野信義コレクション 中国古代の俑と明器―墓室を飾ったやきもの」

(4月20日～7月28日)

「李秉昌コレクション 韓国陶磁」

(8月10日～11月4日)

「人間国宝 塚本快示一定窯白磁の美を追い求めて」

(11月23日～3月23日)

#### (2) 企画展示

##### ①企画展「白禱廬コレクション―中国古陶磁清玩」

(8月10日～11月4日、開催日 75 日、入館者数 12,355 人)

卯里欣侍氏(号白禱廬)より寄贈を受けたコレクションから、中核をなす中国陶磁 95 点を選び展示した。中国の文化、芸術に造詣の深い卯里氏が半生をかけたコレクションは、時代的、技法的に広範囲に及び、氏の美意識を反映したものともいえる。新石器時代から清時代までの約 5 千年にわたる中国陶磁の魅力を辿った。来館者アンケートの結果は 91.9%が満足との回答であり、コレクション形成の軌跡への関心、常設の中国陶磁と対比しての感想、展示構成・作品解説方法などへの評価など、多岐にわたったコメントが寄せられた。ポスターデザインもコレクションの内容を示しかつ一般への親しみやすさを兼ね

備えた効果的なもので好評であった。

## ②国際交流企画展「定窯・優雅なる白の世界―窯址発掘成果展」

(11月23日～3月23日、開催日数98日、入館者数13,244人)

宋代五大名窯の一つにも挙げられる定窯。「牙白」と呼ばれる象牙のような白色を特色とする優雅な作風の定窯白磁は、宋代から金代にかけて宮廷をはじめ広く愛好された。定窯窯址は廃墟となった後、長らく謎だった。しかし、20世紀前半に河北省曲陽県澗磁村にあることが分かり、さらに近年大規模な発掘が行われ、多くの成果が得られ、中国陶磁史上の重大発見の一つとなった。本展では、定窯白磁の歴史を知る上で極めて重要な最新の窯址出土品66点を日本で初めて紹介し、定窯白磁の発展の歴史とその美の秘密に迫った。来館者アンケートの結果は83.3%が満足との回答であり、日本各地から本展を見に来館された方も少なくなかった。本展に併せて、平常展では当館所蔵の定窯白磁の特集コーナーを設け、また特集展でも定窯白磁の美を追い求めた人間国宝・塚本快示の作品を展示し、いずれも好評であった。

## (3) 特別展示

### 特別展「森と湖の国 フィンランド・デザイン」

(4月20日～7月28日、開催日数87日、入館者数51,621人)

フィンランド・デザインの特徴は、美しい自然と独自の文化をモチーフにとりあげ、革新的で洗練された美にあり、“生活の中の美”として時代を超えた作品を作り出したことにある。本展では、フィンランド国立ガラス美術館所蔵の工芸作品を中心とした158件によって、18世紀後半から現在までの作品を紹介した。展示を「18世紀後半～1920年代黎明期」、「1930年代 躍進期」、「1950年代 黄金期」、「1960・70年代 転換期」、「フィンランド・ガラスの今」の5会場に分け、それぞれの時代の特徴を示した。また、工房で用いられた型などの道具も展示し、その製造過程も画像と技法説明のパネルで紹介し、鑑賞の補助とした。また、フィンランドの陶芸作品も合わせて展示した。

## (4) 博物館協会内連携による企画出品展示協力

平成25年10月29日から12月8日まで、当館の国宝2点を含む中国、韓国陶磁の名品21点を「再発見！大阪の至宝―コレクターたちが愛したたからもの―」(於：大阪市立美術館)で展示した。

## 3. 調査研究事業

展示事業に関する調査研究として、高麗青磁に関する資料調査、中国古代の明器に関する作品や資料調査、定窯白磁に関する出土資料や窯址の調査並びに塚本快示作品に関する資料調査をそれぞれ実施した。

また、韓国陶磁調査研究事業では「中後期高麗青磁の研究」をテーマとして韓国や中国の出土資料や窯址等の調査と公開講座を実施した。

なお、外部資金による研究では、科学研究費補助金計1件(120万円)を獲得し、同基盤研究(B)1件を実施した。

#### 4. 教育普及事業

##### (1) 講演会等の実施

展覧会の内容の理解や、調査研究の成果を還元するため講演会、講座、研究会等を開催した。

###### ① 講演会

「フィンランドのガラス工芸について」カイザ・コイヴィスト氏（フィンランド国立ガラス美術館主席学芸員）他計3回、参加者計109人

###### ② 講座

李秉昌博士記念公開講座7「高麗白磁の世界—最新の研究成果から」田勝昌氏（韓国アモレパシフィック美術館・館長）・韓貞華氏（韓国扶安青磁博物館・学芸研究士）・黄信（中国河北省文物研究所・科技信息部主任）他計2回、参加者計131人

###### ③ 学芸員アフタヌーン・レクチャー

第29回「浙江大学『高麗青磁国際学術会議』参加報告」小林仁（当館主任学芸員）他計4回、参加者計74人

###### ④ 連続レクチャー

『定窯・優雅なる白の世界—窯址発掘成果展』開催にあたって」小林仁（当館主任学芸員）他計3回、参加者計83人

###### ⑤ 学芸員による見どころ解説

「森と湖の国 フィンランド・デザイン」重富滋子（当館学芸員）他計4回、参加者計201人

##### (2) ボランティアによるガイド事業

企画展の会期中、土・日・祝日の午前と午後にボランティアによるギャラリーガイドを行った。（128回、参加者計1,426人）

団体見学者については、平日も予約によるガイドを実施した。（22回、参加者計582人）ボランティアガイド事業の充実を図るため、展覧会ごとに学芸員が研修を行った。

#### 5. 各種団体との連携

協会の各館・所との連携強化を図るとともに、各種団体、学校等との連携により、効果的な広報活動と入館者へのサービスの充実を図った（ポスター、チラシ、パンフレットの交換設置、掲載協力、相互情報提供等）。また、中央公会堂、中之島図書館、国際美術館、国際会議場等と連携し、中之島地域の活性化に協力した。

#### 6. 他の博物館等との連携

国内外の美術館、博物館、研究機関等との多角的な連携による共同研究、展覧会の共催、シンポジウム・研究会の開催等の事業協力を行った。

##### ① ベルリン国立アジア美術館への長期貸出の継続

② 中国・北京芸術博物館など計6館での「江戸名<sup>めい</sup>瓷—伊万里展」の開催（当館館蔵品160件による中国巡回展、当館共催、入館者数約50万人）

③ ニュー・サウス・ウェールズ州立美術館「ソウル・オブ・シンプリシティ展」（オースト

ラリア・シドニー)への長期貸出(平成25年2月~平成26年4月、入館者数約100万人)

#### 7. 情報発信・広報宣伝

ホームページ(平成25年度アクセス数171,022件)、館案内パンフレット、年間展示予定、ポスター・チラシ、マス・メディアの活用などにより、東洋陶磁美術館の活動を広く周知した。また、グーグル・アートなどとの提携により、優れたコレクションを世界に向けて情報発信した。

そのほか、入館者に対するアンケート調査を展覧会ごとに実施し、入館者のニーズを把握して事業に反映するとともに、効果的な情報提供、広報活動等に活かした。

#### 8. 来館者サービスの向上

案内サインの改善、展示品のわかりやすい説明など観覧者に配慮した環境作りを行い、受付窓口寄せられる利用者の要望やアンケート調査の結果など、市民の生の声を的確に美術館運営や展覧会に反映させ、来館者のサービスの向上に努めた。

また、館内の喫茶室では、特別展では特別協賛のイッタラ社からの協力のもとに、フィンランドにちなんだメニューをイッタラ社の食器で提供するなどの来館者サービスを実施した。

#### 9. 施設の維持管理

入館者が安全かつ快適に施設を利用できるよう、和式トイレの温水洗浄型洋式トイレへの改修をはじめ、全ての施設、設備の適切な維持管理を行った。警備・受付案内・清掃及び設備等の保守点検を外部委託し、安全・快適な施設の維持管理に努めた。職員による日常的な安全点検も励行し、職場安全衛生委員会の職場巡視も行っている。防災対策では、館職員だけでなく、業務委託業者や喫茶の従事者も一体となって避難訓練を実施し、有機的かつ効果的な防災体制の充実を図った。

#### 10. 出版等事業

展覧会図録(特別展「森と湖の国 フィンランド・デザイン」、企画展「白檜廬コレクション 中国古陶磁清玩」、国際交流企画展「定窯・優雅なる白の世界―窯址発掘成果展」)、館蔵品図録(「堀尾幹雄コレクション濱田庄司」、「掌中の美 沖正一郎コレクション鼻煙壺」など)の製作販売並びにミュージアムグッズの製作販売を行った。

#### 11. 友の会事業

講演会、研究会、研修や「友の会通信」の発行などを通して会員へ東洋陶磁に関する情報提供等を行う一方、美術館の利用促進や普及活動などに会員の協力を求めるなど相互連携を図った。

## 7 大阪城天守閣管理運営事業

昭和6年に大阪市民の寄付によって復興された大阪城天守閣は、大阪はもとより日本の文化観光のシンボルという特徴を備えた歴史博物館である。この強みを生かし平成25年度は、展示事業として調査研究に裏打ちされた質の高い常設展、大阪城や大阪の歴史や魅力を伝える特別展・テーマ展などに取り組み、普及事業として重要文化財に指定されている城内の古建造物の特別公開、季節ごとの様々なイベントなどを展開した。またこれらへの集客を促進するため、幅広い情報提供や広報宣伝にも力を入れ、大坂の陣400年プロジェクトにも取り組んだ。その結果、昨年来のアジア地域を中心とした外国人観光客の増加傾向にも押され、155万人もの入館者を迎えることができた。これは前年度比2.9パーセント増であり、27年度経営目標や、平成の大改修直後の平成9年度をも凌ぎ、昭和58年度の築城400年以来の記録となった。

### 1. 資料の収集、保管事業

「織田信孝書状（羽柴秀吉宛）」、「豊臣秀頼黒印状（黒田長政宛）」、「淀川過書船奉行木村宗右衛門家文書」、「加藤清正画像」など、資料的価値および展示効果の高い資料12件を購入により取得した。また保管事業として、所蔵品の「関ヶ原合戦図屏風」（6曲1双）の修理に着手した。

### 2. 展示事業

#### (1) 常設展示

2ヶ月を目途に文化財展示を全面的に更新し、そのつど3階・4階のフロアごとに、新しいテーマの展示を立案した。戦国史の謎解きを楽しむ「ミステリー戦国史」、日本史の大きな流れのなかで大坂の陣をとりあげた「歴史を動かした“内乱”―源平合戦から大坂の陣まで―」など、年間9本のテーマで展示した。また、モンテリオール世界映画祭にて最優秀芸術貢献賞を受賞した映画『利休にたずねよ』の公開にあわせて、映画で使用された衣装や小道具を大阪城天守閣所蔵の千利休自筆書状など関連資料とともに展示する「利休にたずねよ」特設展示コーナーを設けた。

#### (2) テーマ展

##### ① 「南木コレクションシリーズ第13回 古写真にみる なにわの行事・祭礼」

(平成25年3月20日～5月6日)

大阪城天守閣が所蔵する大阪の郷土庶民資料「南木コレクション」の内、昭和初期に撮影された大阪の年中行事や祭りの古写真を公開した。江戸時代以来の伝統、時代に合わせた新しい試み、また今では途絶えてしまった貴重な行事の写真100点をパネル展示し、あわせて関連する絵画資料約30点も展示した。平成25年度会期中210,436人の来館者を迎え好評を得た。

##### ② 「乱世からの手紙―大阪城天守閣収蔵古文書選一」

(平成26年3月21日～5月6日)

大阪城天守閣が収蔵する戦国武将発給文書の内、乱世の諸相が読みとれる内容豊かなものの84点を参考資料とともに展示した。くずし字の読みをパネルで示すなど、古文書のお

もしろさや迫力、奥深さをわかりやすく紹介した。平成 25 年度会期中 87,345 人の来館者を迎え好評を得た。

### (3) 特別展

「史跡・重要文化財指定 60 周年記念特別展 大阪城はこの姿一戦災からの復興、整備、そして未来へー」（平成 25 年 10 月 5 日～11 月 24 日）

第二次大戦による荒廃から立ち直り、史跡公園として整備されてきた今日までの大阪城の歩みを関連資料や写真パネルなど 104 点で振り返った。最新の研究成果を踏まえ、現代大阪城の知られざる意外な歴史や魅力の紹介に努めた。会期中 242,471 人の入館者を迎え、好評を得た。

## 3. 調査・研究事業

「豊臣時代資料・史跡調査」として、大坂の陣で活躍した後藤又兵衛の関連資料の調査を兵庫県加西市、宇喜多秀家の旧臣戸川達安の関連資料の調査を岡山県都窪郡早島町で実施した。また「徳川時代大坂城関係資料調査」として、滋賀県甲賀市にて同市所蔵「水口藩加藤家文書」に含まれる大坂加番関係資料の調査を実施した。

『大阪城天守閣紀要』41 号、『徳川時代大坂城関係史料集』17 号を刊行して、調査研究の成果を公表した。

## 4. 普及事業

### (1) 教育普及

大阪城内や大阪市内外で開催された講演会・シンポジウム・史跡見学会等へ積極的に講師を派遣し（54 件）、歴史や資料に関する知識の普及をはかった。

また、館内に兜・陣羽織（レプリカ）の試着体験コーナーを設け、希望者（年間を通じて約 4 万 8 千人）に体験の機会を提供した。

### (2) 資料の活用・普及

収蔵品や関連資料の写真を作成管理し、公共機関や研究者、出版・放送関係機関等からの掲載や複製作成、商品化の要望に応じ積極的に提供することで、資料の普及に努めた。写真資料の提供数は 623 件 1,732 点におよんだ。

他の博物館施設等からの文化財貸出依頼に対しては 29 件 212 点に応じ、展覧会の企画や展示指導等に関する「特別協力」依頼に対しては 5 件に応じた。

展覧会図録、名品絵はがき、館蔵品目録、大阪城の案内書等を作成し、頒布した。

## 5. 学校・市民等との連携

博物館学実習として 7 月 22 日から 26 日の 5 日間にわたって、4 校から 8 名の大学生を、また、中学生の職場体験は 4 校から 10 名の受入を行った。

さらに、市内の小・中学校と連携して「大阪城写生画展」を開催した。

○「第 42 回大阪城写生画展」（平成 26 年 1 月 1 日～1 月 31 日）

大阪の将来を担う小学生・中学生が大阪城を大阪の誇りに思い、憩いの場としてより一層親しむと同時に、大阪の歴史・文化についての理解を深めることができるよう、

大阪市内の小・中学校と連携し、大阪城の写生画を募集して入選作品を展示した。

上記の他、地域・市民団体や企業、大阪城公園内および周辺イベント(大阪ウオーク 2013、KANSAI ウオーク 2013、大阪城サマーフェスティバル 2013 他)などと連携し、相互広報や相互入場割引の実施により、集客効果を高めた。

また、春・秋のイベントでは、大阪府内・市内の高校生とも連携し、和太鼓や吹奏楽の演奏をとおして、より多くの集客に努めた。

## 6. 情報発信、広報宣伝

国外の観光客が増加する中、大阪を代表する文化・観光施設にふさわしい特別展、テーマ展及びイベント等を実施するとともに、ホームページ(訪問者数 106 万件/年・ページビュー数 400 万件/年)・ポスター・チラシ・リーフレット(日本語、韓国語、中国繁体字、中国簡体字、英語の各言語別及び子ども向け)・マスメディア等をとおして、また、グーグルマップのストリートビューに天守閣内部を公開するなど、幅広い効果的な情報発信・広報宣伝を行うことにより、一層の集客力の向上に努めた。

## 7. 来館者サービスの向上

改札・インフォメーションにおける外国語対応及び音声ガイドシステムの拡充ならびにリーフレット、館内サイン、文化財展示解説などの外国語表記にとりくみ、館内案内の充実を図った。また、22 年度より導入した大阪歴史博物館とのセット入場券については両館で 25,834 枚を販売し、来館者サービスに努めた。

## 8. 施設の維持管理

改札・案内・警備・清掃・昇降機の運転業務を業務委託により実施するとともに設備等の定期的な保守点検を実施し安全で快適な施設の維持管理に努めた。

また、空調機の更新や 8 階回廊「舞鶴」の修復を行った。

## 9. 自主事業

### (1) 史跡の活用・普及事業

大阪城の史跡・重要文化財指定 60 周年記念として、重要文化財に指定されている城内古建造物の特別公開を行うと同時に天守閣館長と巡る大阪城歴史ツアーを実施したほか、訪れた人々が大阪城や大阪の歴史・文化を身近に感じていただけるようなイベントを季節ごとに開催し、大阪城の魅力を高めるとともに集客に努めた。

#### ① イベント

- a. 「大阪城ファミリーフェスティバル 2013」(平成 25 年 5 月 3 日～5 月 6 日)
- b. 「天守閣の夏」(平成 25 年 7 月 6・7・26 日)
- c. 「大阪城天守閣の秋まつり 2013」(平成 25 年 11 月 2 日～11 月 4 日)
- d. 「迎春イベント」(平成 26 年 1 月 2 日～1 月 3 日)

## ②姉妹城・友好城郭連携事業

長浜城との姉妹城締結 30 周年記念事業として、両城に互いに看板を設置するとともに、長浜城歴史博物館友の会の「豊臣秀吉を基礎から学ぶ講座」への講師派遣、同会の大阪城見学会の受入、同館の特別展への特別協力、両城で互いの半券による入館割引を実施した。

## ③大坂の陣 400 年プロジェクト

2014・2015 年に「大坂の陣 400 年」を控えて、大坂の陣 400 年プロジェクトをスタートさせ、大阪城を中心に関係先にのぼりを設置するとともに、大坂の陣【読本】や大坂の陣カレンダー2014 を制作、配布した。各新聞・テレビ・ラジオにも大坂の陣 400 年への取組を働きかけ、幾つものテレビ番組や記事掲載を実現した。とりわけ正月特集では新聞 3 紙が大坂の陣 400 年を特集した。

また、400 年にあたる 2014 年の 1 月 1 日を臨時開館し「大坂の陣 400 年」の始まりを盛り上げた。

## (2) 大阪城天守閣売店の運営

天守閣売店は、毎月売店会議を開催し効率の良い運営及び経費削減に努めるとともに、ホームページを活用し、季節ごとの売れ筋商品を紹介する等広報活動を充実させ収入確保に努めた。また、地元中央区とも連携し、中央区のキャラクター「ゆめまるくん」の商品化に協力した。

## 8 法人の連携事業等

総務部事業企画課では、協会各館・研究所が相互に連携した事業、外部の関係機関と連携した事業、協会としての共同広報事業などを実施しており、平成 25 年度は新たに協会内組織の連携による展覧会「再発見！大阪の至宝」の開催や、大阪市立大学との包括連携協定に基づいての2つのシンポジウムなど、さらに多様な連携事業の展開を行った。また平成 25 年度当初にリニューアルした博物館協会ホームページについては、各館所と連携しての活用をさらに進めてきた。

### 1. 協会独自の連携事業

指定管理期間最終年度に協会組織全体で取組む展覧会「再発見！大阪の至宝－コレクターたちが愛したたからもの－」を、大阪市立美術館の特別展として開催した（10月29日～12月8日）。総務部事業企画課は平成 24 年秋に発足した協会内プロジェクトチームの事務局を務めるとともに、特別展実行委員会にも参画した。主な展示品は市立美術館・大阪歴史博物館・大阪城天守閣・市立東洋陶磁美術館・市立新美術館建設準備室の所蔵品を中心に、第1章「中国美術・韓国美術へのあこがれ」、第2章「日本美術の豊饒」、第3章「私立美術館に開花したコレクション」、第4章「大阪近代美術の諸相」と構成された。大阪市の美術館・博物館が所蔵する主要な美術コレクションについて、その収集の軌跡をコレクターのまなざしとともに振り返るとともに、個々のコレクションを育んだ大阪における、大都市の欠かせない施設としてのミュージアムとコレクションの関係を世に問うものとして企画された。大阪文化財研究所と大阪市立自然史博物館からもコラム的な展示参画があり、目標とした大阪市博物館協会を挙げての連携展覧会を実現した。

市立美術館のリピーターを中心に高い評価を得ることができ今後の連携展覧会の企画や運営のあり方を考える上で大きな成果をあげることができた。

また、この特別展「再発見！大阪の至宝」を前にして、5月25日には国際博物館の日記念シンポジウム「ミュージアムとコレクション」を大阪歴史博物館で開催した。館長・所長による座談会も織り込みながら、大阪におけるミュージアムとコレクションの関係を紹介し、今日まで果たしてきた大阪市のミュージアムの役割と未来に向けて成長するコレクションを展望する企画とし好評を得た。

### 2. 大学連携

平成 23 年 3 月に締結した大阪市立大学との包括連携協定に基づき様々な取組みをすすめてきた。平成 24 年度から始めた市立大学の博物館学 3 講座（博物館経営論・博物館資料保存論、博物館展示論）に、各館・所の学芸員が出講した。初年度の総括を踏まえ、平成 25 年度も引き続き取組んだが、さらに平成 26 年度も継続することを双方で確認している。新たな取組みとしては、①60 周年となる難波宮跡発掘と大化改新論の今日をテーマに最新の研究成果を議論するシンポジウム「難波宮と大化改新」を 2 月 23 日に、②豊臣期大坂城石垣を中心に徳川期大坂城や豊臣期以前の地下構造などを明らかにする連続講座「大坂城の地中を探る」の 2 事業を大阪歴史博物館で開催した。両事業とも定員を大きく超える市民の参

加申し込みがあり、マスコミの注目も集める事業となった。毎年大阪市立大学文化交流センターで開催される博学連携講座については、自然史博物館との連携で「昆虫『超』能力ー博物学・理学から眺めた虫たちの不思議」が、11月から12月にかけて4回開催された。

大阪市立大学との包括連携については3年が経過したことや、平成25年2月に発足した市立大学の「地域連携センター」の活動に「博学連携事業」が位置付けられていることもふまえて、両者で活動の総括を行い今後のとりくみについて検討する必要がある。

学生等を対象にキャッシュレス入館ができる「キャンパスメンバーズ」制度は当協会と大阪市立科学館で平成23年度から導入し、平成25年度は新たに大阪市立咲くやこの花高校の加入を得て、大学2校・高校2校が参加されている。新規加入校の開拓とともに、既加入校の利用促進も課題である。

### 3. 学校連携

子どもたちに博物館の魅力を知ってもらい、学びの場としてより活用してもらうため、各館・所では学校連携を取組んでいる。博物館協会の経営目標のひとつに掲げていることから平成23年度以降、各館の小中学校の利用状況や学校関連事業の調査を行い、各館の傾向を分析してきている。平成25年度は学校団体利用数が減少している。これは、新学習指導要領の実施による授業時数の増加によって博物館利用の時間数の確保が難しくなってきたこと、また大阪城天守閣の総来館者数の増加により、混雑を回避する学校による団体来館の減少が理由と考えられる。平成25年10月以降、総務部事業企画課が行った大阪歴史博物館利用校についてのアンケート調査によると社会科の歴史分野での利用が多いことがわかった。自然史博物館では理科学習で使われることも多いことから、博物館の利用は、教科と関連づけて活用されていることがわかる。博物館が学校での学習とどのように関連づけるのか、明確な教科・単元の対応について、整理し学校に提示するなど、博物館の学校向け事業について教員に積極的にアピールしていく必要がある。

こうしたことから平成26年3月には学校団体の利用促進を図るための周知チラシ「授業に役立つミュージアム活用ガイド」を作成し、市内小中学校や区役所等に配布した。教育センターとの連携等により、博物館と学校の連携の核となる教員を育て、博学連携の授業実践事例を集積することも今後の課題である。

### 4. 「大阪てくてくミュージアム」を中心とした共同広報事業

24年度から共同広報事業を「大阪てくてくミュージアム」とネーミングしてきたが、2年目の取組みを進めた。

総務部事業企画課が中心となり、各館・所と連携して実施したのは、「旅」をテーマとしたミュージアム連続講座（1～2月に5回、会場：大阪市立総合生涯学習センター）や共同キャンペーンとしての「ミュージアムウィークス大阪2013ーもっとお宝大公開ー」（10月29日～12月8日）の2事業である。ミュージアムウィークスについては、特別展「再発見大阪の至宝」にちなみ、各施設の個性あふれるコレクションの中から逸品（お宝）を紹介する取組みとし、参加者に小冊子「てくてくミュージアムGUIDE2013」をプレゼントした。

その他の取組みとしては、2年ぶりにジュンク堂書店大阪本店の協力を得て「博物館協会

ブックフェア」(5月13日～7月28日)を開催し、5館1所が発行した図録等の販売を行うとともに、博物館群8施設と大阪文化財研究所の紹介パネルの掲示を行った。市役所ホールで例年通り実施された「生涯学習情報発信ウィーク」(11月7日～11月15日)にも参加し、前述の紹介パネルを掲示するとともに関連チラシを設置した。また、26年3月には博物館群8施設と大阪文化財研究所の紹介パネル(英文版)を新たに作成した。

## 5. 文化連携事業

民間文化団体等との連携を図る「文化連携事業」について25年度は、自然史博物館では「音楽と自然のひろば」、市立美術館では「能に親しむコンサート」、歴史博物館では「なにわ歴博寄席」「アニメソングコンサート」「雅楽」を実施した。新たな来館者の獲得にも寄与する事業として実施してきたが、共同広報のあり方も含めて事業のあり方を再検討することが課題である。

## 6. 情報発信

連携事業や法人全般に関わる様々な情報を迅速かつ効果的に発信するため、平成25年度当初に協会ホームページのリニューアルを実施し、この1年間各館・所との連携による情報発信に努めポータルサイトとしての機能を高めてきた。そうした結果、アクセス数は22年度が月平均1,400件であったが、23年度が1,700件、24年度が2,080件と推移し、25年度については3,517件と増加してきている。より一層魅力あるホームページとなるよう改善を図っていく。

## 7. 外部評価

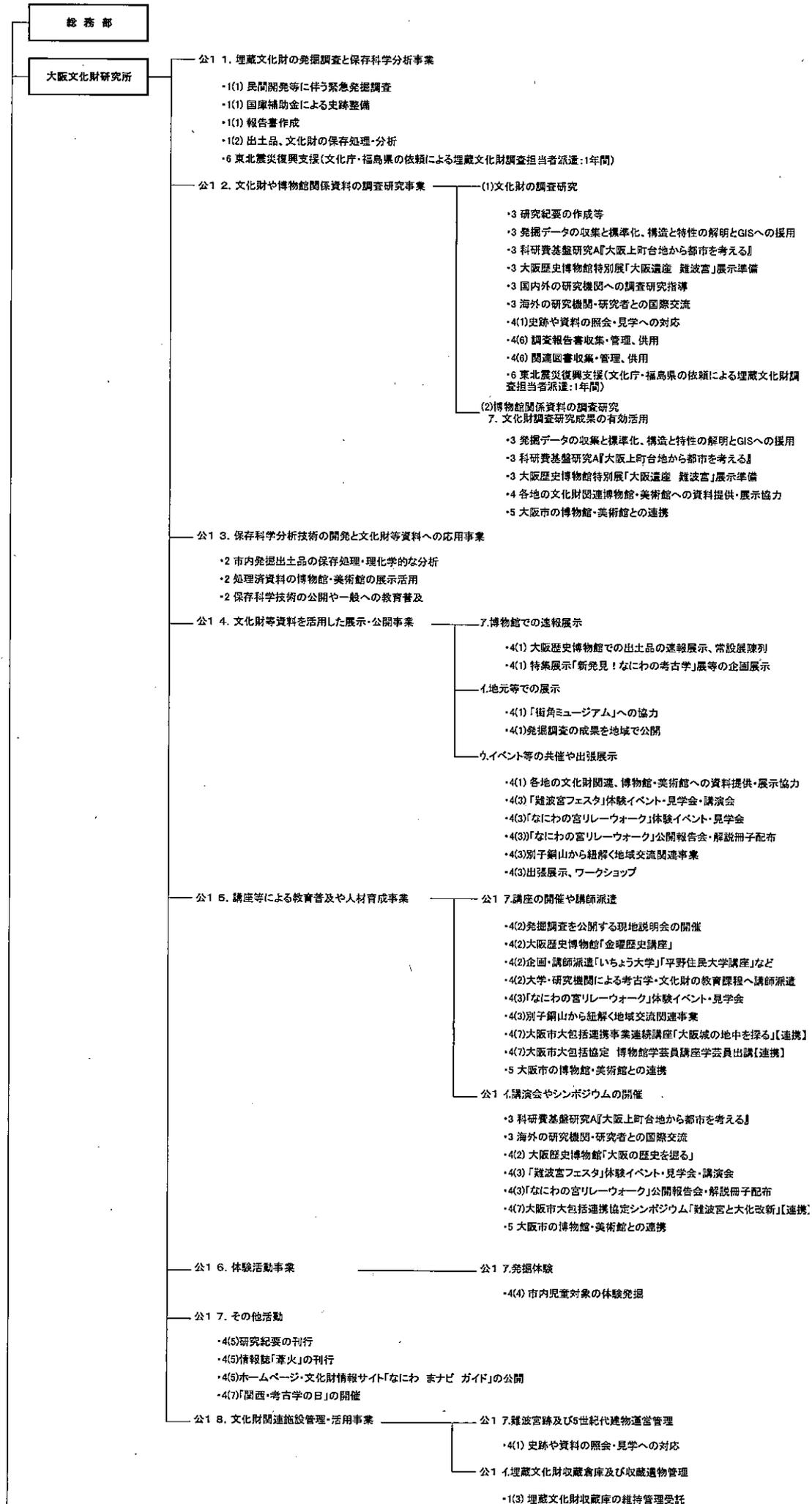
25年度は外部評価委員会を開催しなかったが、24年度に「総合評価」として外部評価委員から受けた多岐にわたる指摘内容についての改善に取り組んだ。

## 8. 外部資金獲得による事業の実施

23年度から実施してきた「地域の博物館や文化資源を活用した『上町台地』の魅力発信による観光振興・地域活性化事業」は、最終年となった3年目の取組みを進めた。総務部事業企画課も「なにわ活性化実行委員会」事務局の一員として参画してきたが、平成25年度も文化庁から補助を受け、大阪歴史博物館・大阪文化財研究所を中心に以下のような事業を行うことができた。この事業で初めての取組んだ「AR難波宮」「なにわまナビガイド」についても、さらに新たなコンテンツの追加や外国語対応の充実を図るとともに、「難波宮フェスタ」や「なにわの宮リレーウォーク」など市民団体と連携した事業が継続された。また、2月23日には3年間の活動報告会を開催するとともに、「なにわの宮リレーウォーク」の3年間の集大成として「上町台地の歴史散歩」を刊行しガイドブックとして市民配布することができたことも大きな成果となった。

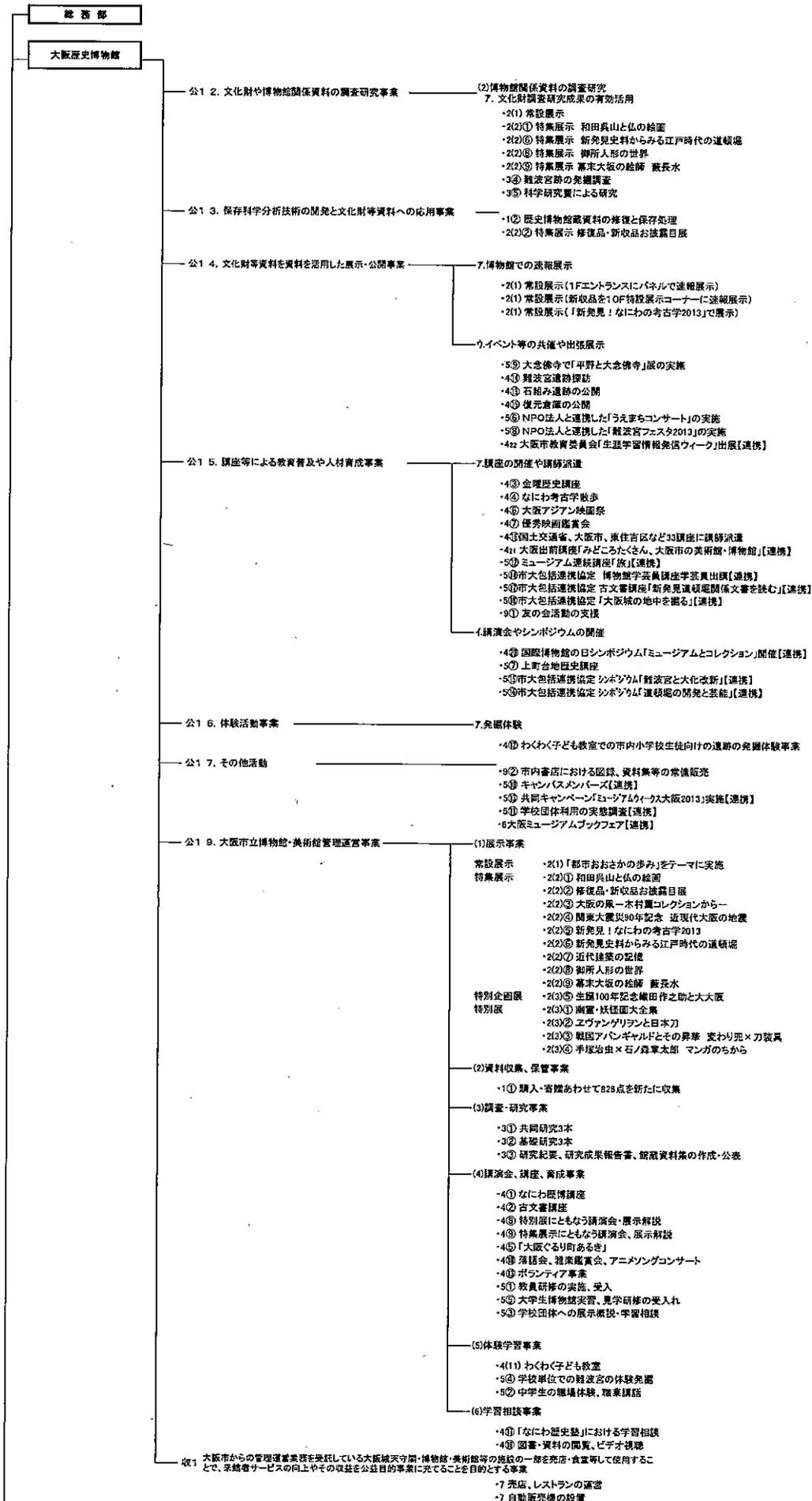


平成25年度 事業・組織体系図



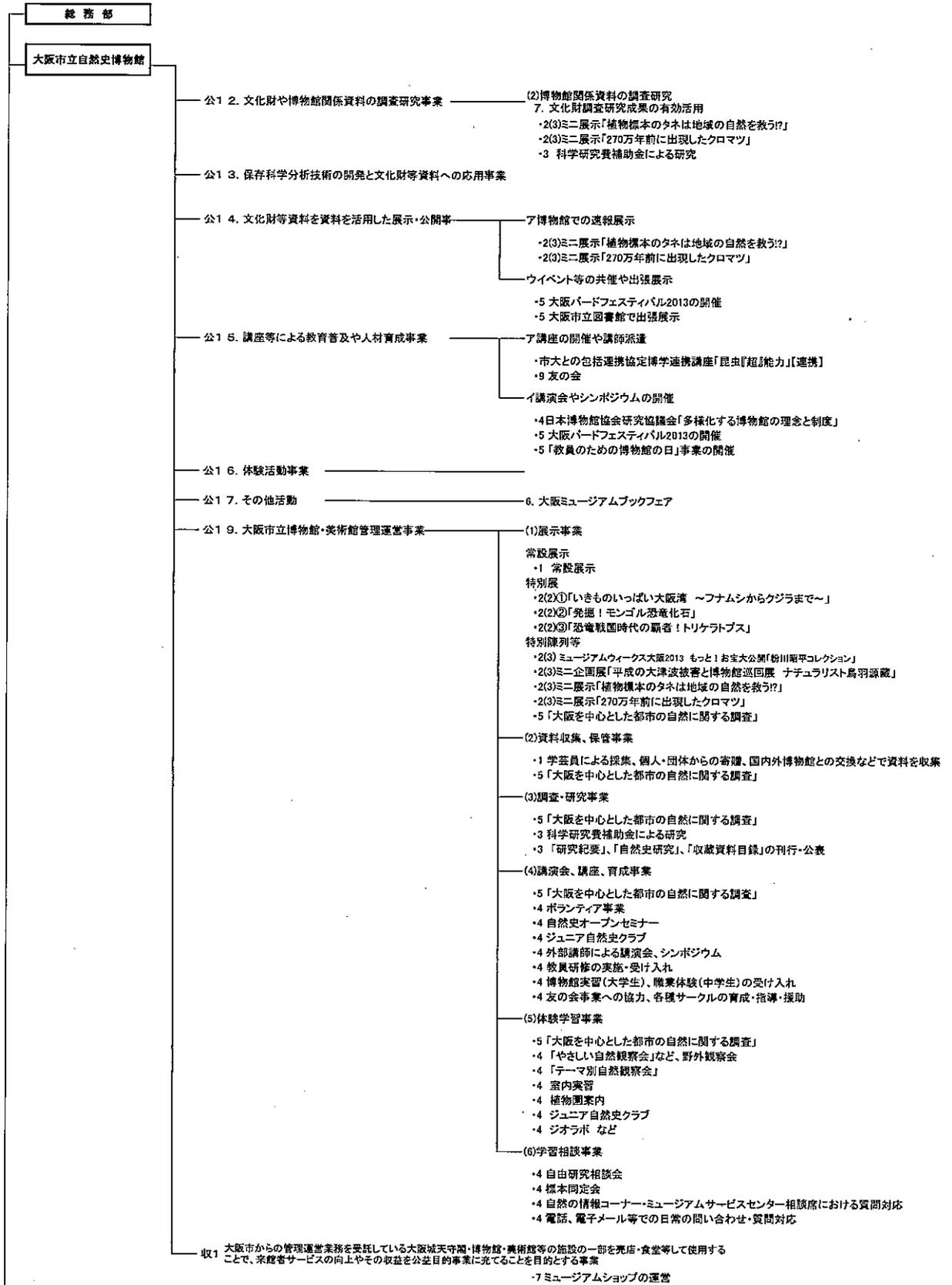


平成25年度 事業・組織体系図



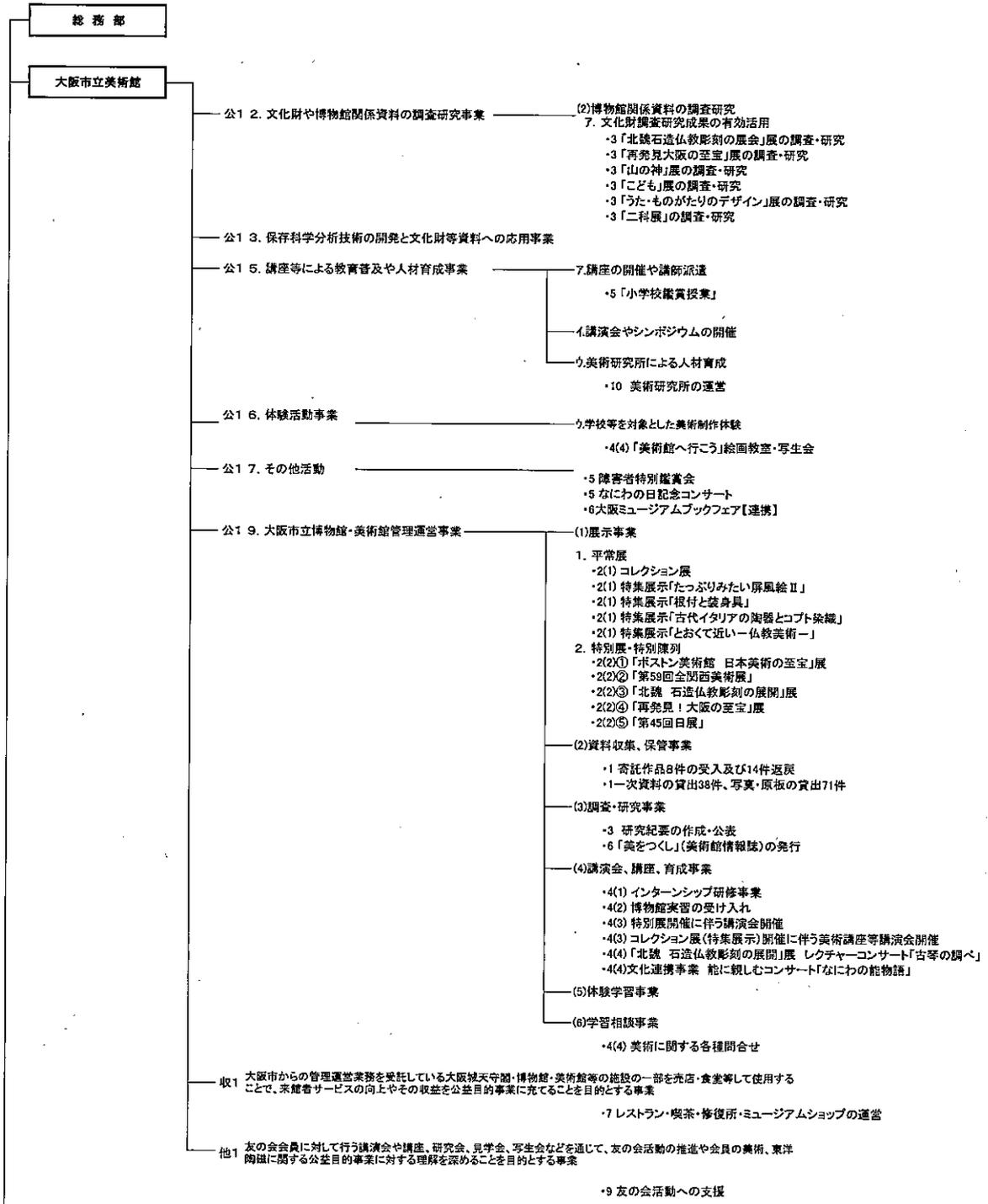


平成25年度 事業・組織体系図



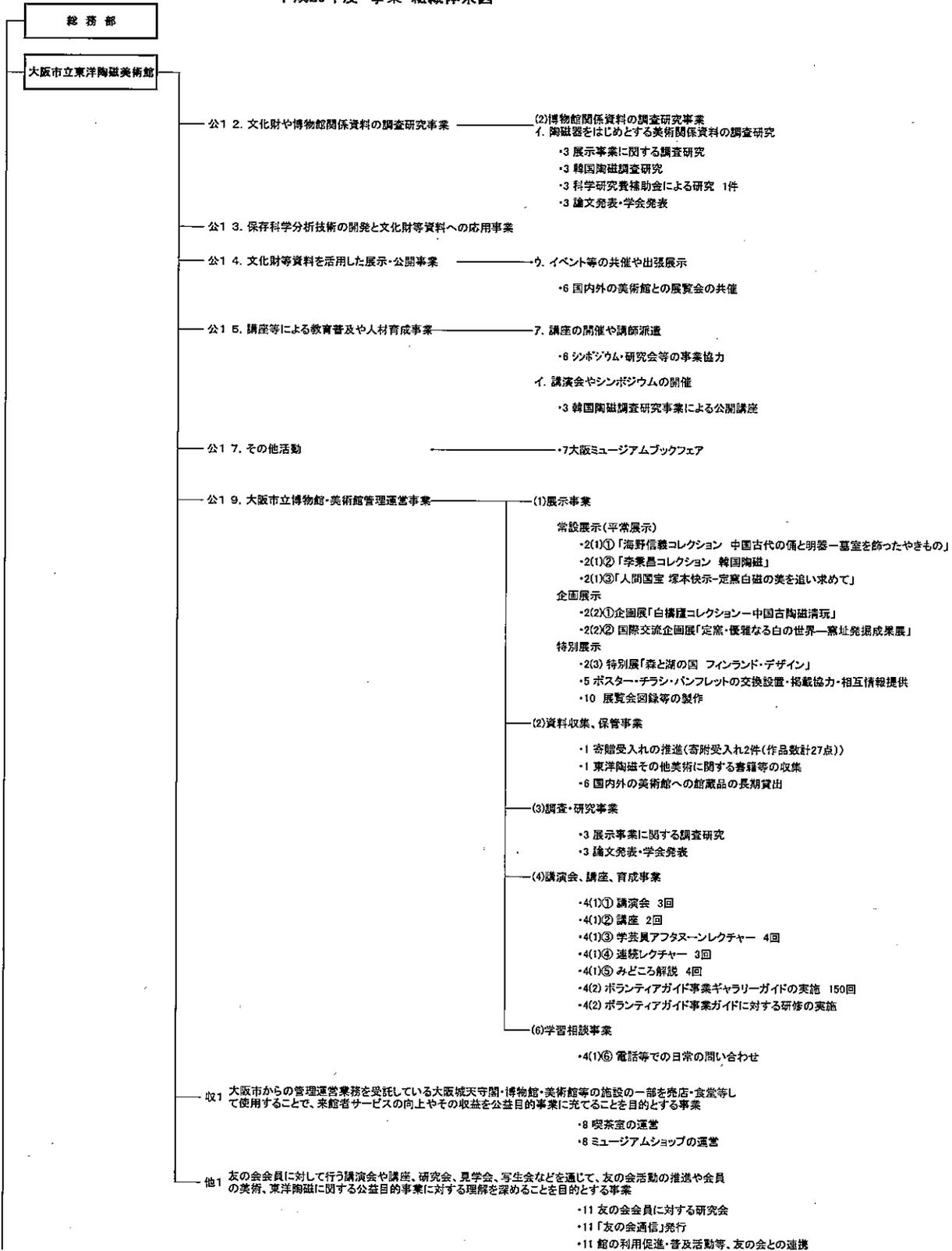


平成25年度 事業・組織体系図



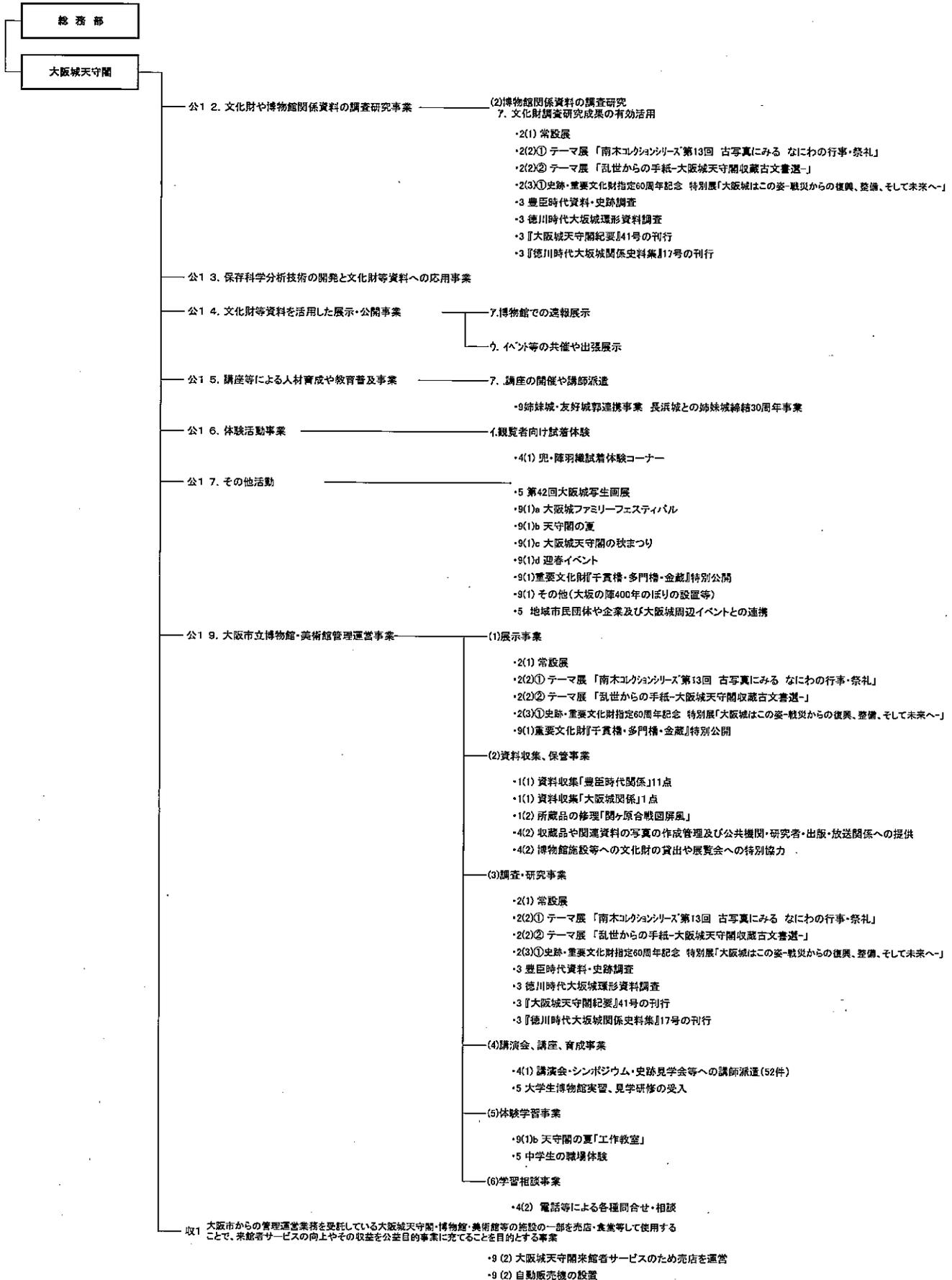


平成25年度 事業・組織体系図





平成25年度 事業・組織体系図



## 9. 処 務

### (1) 処務事項

第1回理事会（決議の省略）	平成25年4月1日
第1回評議員会（決議の省略）	平成25年4月24日
第2回理事会	平成25年6月7日
第2回評議員会	平成25年6月24日
第3回理事会	平成25年7月1日
第4回理事会	平成26年3月13日

### (2) 理事会及び評議員会に関する事項

会 議 名	開 催 年 月 日	開催場所/ 開催方法	議 題
第1回理事会	平成25年4月1日	決議の省略	第1号議案 平成25年度第1回評議員会の開催について (1)開催方法：決議の省略により開催する (2)評議員 山田 昇氏の後任評議員の選任について 第2号議案 評議員1名の辞任に伴う後任候補者として森本充博氏を推薦すること
第1回評議員会	平成25年4月24日	決議の省略	第1号議案 評議員1名の辞任に伴う後任評議員として森本充博氏を選任すること
第2回理事会	平成25年6月7日	大阪歴史博物館	第1号議案 平成24年度事業報告について 第2号議案 平成24年度決算について 第3号議案 評議員会の招集について 報告事項 職務執行の状況について
第2回評議員会	平成25年6月24日	大阪歴史博物館	第1号議案 平成24年度決算について 第2号議案 評議員の選任について 第3号議案 理事の選任について 報告事項 平成24年度事業報告について

会議名	開催年月日	開催場所/ 開催方法	議 題
第3回理事会	平成25年7月1日	大阪歴史博物館	第1号議案 理事長の選定について 報告事項 平成25年度第2回評議員会の決議内容について
第4回理事会	平成26年3月13日	大阪歴史博物館	第1号議案 平成26年度事業計画について 第2号議案 平成26年度予算について 報告事項1 役員の職務執行の状況について 報告事項 大阪府市統合本部会議「経営形態の見直し検討項目（A項目）文化施設について」

### (3) 理事及び監事一覧

平成26年3月31日現在

会 長	脇 田 修	(大阪大学名誉教授)
理事長	楞 川 義 郎	(公益財団法人大阪市博物館協会理事長)
専務理事	西 良 文	(公益財団法人大阪市博物館協会事務局長)
	石 垣 忍	(株式会社林原メセナセンター 林原自然科学博物館長)
	篠 雅 廣	(大阪市立美術館長)
	谷 直 樹	(大阪市立住まいのミュージアム館長)
	長 山 雅 一	(大阪文化財研究所長)
	福 永 伸 哉	(大阪大学大学院文学研究科教授)
監 事	伊 藤 由之助	(税理士)
	島 村 美 樹	(弁護士)

### (4) 評議員一覧

平成26年3月31日現在

評議員	安 藤 則 男	(公認会計士)
	岸 本 孝 之	(大阪市経済戦略局文化部長)
	柴 原 永遠男	(大阪市立大学大学院文学研究科特任教授)
	武 田 佐知子	(大阪大学大学院文学研究科教授)
	谷 田 一 三	(大阪府立大学大学院理学系研究科教授)
	松 崎 和 義	(NHK大阪放送局副局長)
	水 野 正 好	(公益財団法人元興寺文化財研究所所長)
	森 和 幸	(三井住友銀行総務部部長)
	森 本 充 博	(大阪市教育委員会事務局生涯学習部長)
	山 梨 俊 夫	(国立国際美術館長)